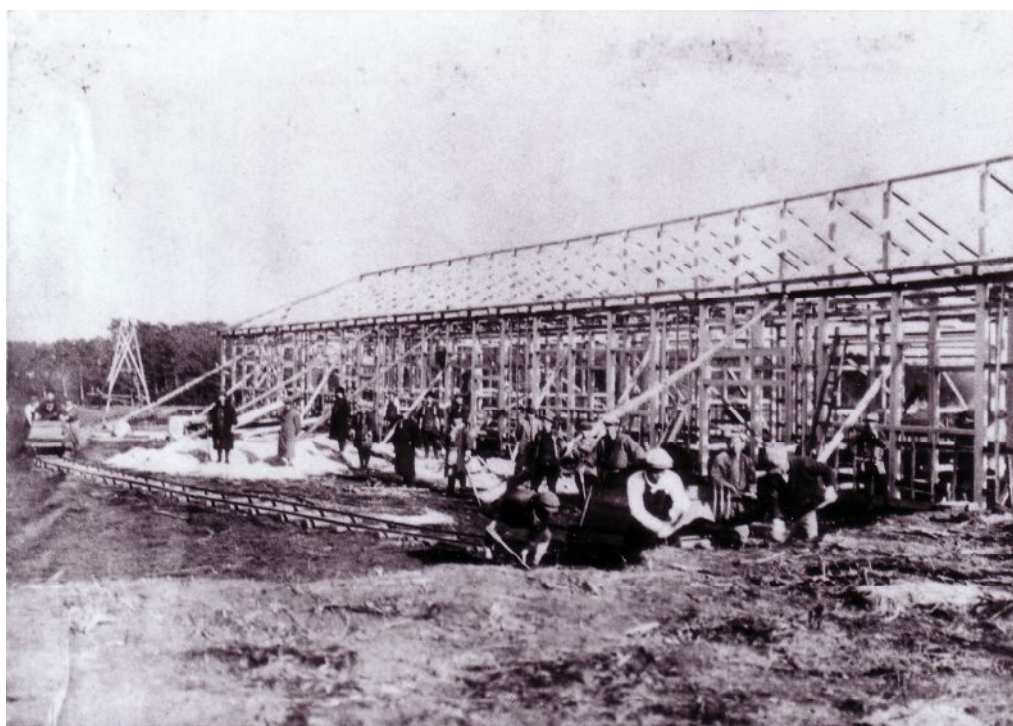


綾瀬小学校 火災と震災を乗り越えて

= 校舎再建と授業の様子 =



綾瀬市教育研究所

発刊によせて

「教育史編さん研究会」では、これまで綾瀬の教育に関するさまざまな資料の発掘・調査・研究・刊行をはじめ、資料の保存・活用にも力を注ぎ、広く関係者の期待に応えてまいりました。

こうした取り組みは、本市の教育のあゆみを振り返り、将来を展望するうえで大変意義深いものといえます。

今回は、大正時代に起きた綾瀬小学校の火災と、関東大震災によって起きた校舎の倒壊というたび重なる災難に対して、当時の人々がその再建にどのように立ち向かい、活躍したのか、村の教育にかけた人々の情熱を当時の資料等を基に描き出してみました。

発刊にあたっては、その時代が明治・大正期のことだけに資料は少なく、細かい状況まで克明に浮びあがらせることには限界もありましたが、研究会ではできうる限りの実態把握につとめ、ここにまとめることができました。

内容は、まず、火災により農家の蚕室や寺院を借りて行われた授業のことや、再建のために村人がこぞって協力した寄

綾瀬市教育研究所 所長 丸山 芳宏

付や労力の奉仕、さらには建築資金調達の苦労などに触れながら、多くの力が結集してついに成し得た新校舎完成までの道のりを追ってみました。続いての大震災では、神社境内での青空教室による授業をはじめ、仮校舎での授業、校地の移転とその建設費、新校舎における授業、借金のゆくえ、さらには、子どもたちに根ざした教育へ向かう昭和七年ころまでのことを描き、全体をとおして内容の一つひとつに、急な教育環境の変化に奮闘した人々の教育への思いが見てとれます。これは本市にとって、歴史を映す貴重な教育史料でもあります。そして、こうした先人たちの教育に対する数々の努力の歴史が積み重なって、現在の本市教育があるといえます。

教育史編さん事業は、単に埋もれている資料を掘り起し、記録・保存するのみならず、この冊子にもうかがえるように、人間性を育てる教育という部分も大切にしていかなければなりません。今後とも一層のご支援を賜れば幸いです。

終わりに、本書の刊行にあたりご協力いただきました関係機関並びに関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

目次

発刊によせて

大正期の綾瀬小学校

第一次世界大戦・	1
教育費が過重・	3
新しい教育の動き・	6
学力調査・	6
理科教育・	6
新しい体操教育・	8
連合運動会・	9
新しい教育を求めて・	10
教育環境を整備する・	11
年々上昇する教育費に耐える・	11
教室を増やす・	12
綾瀬小学校の火災	
突然の火災・	14
広がる支援の輪・	16
火災の責任をとる・	18
校舎再建を決める・	20
農家を借りて授業再開	
あらゆる物が燃えた・	22

農家を借りて授業を再開・

ないないづくしの授業・

児童の発想を大切にした授業・

総力をあげて校舎再建

村民の労力奉仕・

建築計画が決まる・

建設工事が始まる・

校舎が完成する・

関東大震災で壊れた

昼の大地震・

綾瀬村の被害・

臨時休業一カ月・

仮校舎をつくる・

仮校舎の綾瀬小学校

仮校舎の授業・

歴史科の研究・

綾瀬小学校の研究授業・

研究の広がり・

校舎の再建と借金

綾瀬村の財政危機・

校舎の再建を始める・

校舎の建築が始まる	48
新しい校舎ができる	49

変わる社会と綾瀬村の教育

学校の整備が進む	51
修身科の研究を進める	51
体操科の授業研究と連合運動会	53
農業教育を進める	54

ひどい不景気の中で

ひどい不景気となる	55
起債をめぐる攻防	56
給料の一部を寄付	58
起債問題のゆくえ	59

郷土と子どもに根ざした教育

厳しい時代の始まり	61
郷土と子どもに根ざした教育	62
農業教育にかける	64

参考文献・資料	66
---------	----

〔凡 例〕

一 本文の表記は、読み易いように現代仮名づかいと常用漢字を原則的に使用したが、資料中の語句や固有名詞などについて是一部例外としたものもある。

二 敬語・敬称は略した。

三 写真の所蔵名については、綾瀬市所蔵のものは省いた。

*表紙写真：大正一四年の校舎新築工事（現在地）〔綾瀬小学校蔵〕

大正期の綾瀬小学校

第一次世界大戦

一九一四（大正三）年七月二八日、第一次世界大戦が始まりました。日本の重要な輸出先であるヨーロッパが戦場となったとあつて、八月三日に株式市場は、株価が大暴落しました。

八月二三日、日本政府もドイツに宣戦布告し、第一次世界大戦に参戦しました。この年、綾瀬村出身の現役兵士一三名が戦争に動員され、一三頭の綾瀬村の馬が徴発されました。

戦争がアジアや太平洋地域に拡大されたために、九月一四日に、生糸相場が暴落し、養蚕が主たる産業である綾瀬村の人々は不安になりました。

翌一九一五（大正四）年の生糸相場は、近來にない低い価格となりました。

戦争が長引くにつれ、ヨーロッパ諸国は、あらゆる物が不足するようになり、横浜港の生糸貿易も順調に回復し、増加するようになりました。

一九一六（大正五）年の貿易額は、一九一四年の一・五倍にもなっていました。

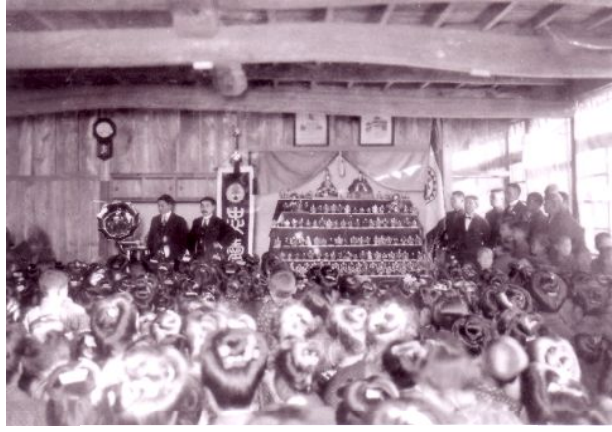
横浜港から輸出された生糸の貿易額

一九一四（大正三）年	一億六〇八五万円
一九一五（大正四）年	一億四八六〇万円
一九一六（大正五）年	二億五七六五万円

生糸の貿易額と同じように、生糸価格も上昇し、綾瀬村の人々も久々に明るさを取り戻しました。

生糸（中級品）の価格（円）（二〇〇斤当り）

一九一四（大正三）年	八八四円
一九一五（大正四）年	八三〇円
一九一六（大正五）年	一一七一円



ひな祭り（大正4年）（綾瀬小学校蔵）

大人の顔が明るさを取り戻すと、児童の顔も明るくなります。明るい児童の顔を見ることは、綾瀬小学校校長桜井諒^{いさむ}の最大の楽しみでした。

ところが、毎朝児童を出迎える桜井校長の顔が、どうもさえないものになって行きました。綾瀬小学校の教員の数を思うように確保できないからです。そのため、ここ数年、短期間であ
るにせよ、欠員が生じていました。

一九一六年度には四人の教員が退職し、三人の教員が就職しました。一名の欠員は、どうしても埋められませんでした。

一月三一日 濱田丹次郎 退職
三月三一日 紀あ里 退職
三月三一日 見上盈 退職
四月 一日 永野藤吉 就職
四月 一日 小山寿 就職
四月 一日 守山マサ 就職
四月三〇日 梶原ホノ 辞令退職

この年は、まだ退職の直後に教員を確保できていましたが、一九一七（大正六）年度になると、年度途中の退職になり、後任の確保がより難しくなりました。

四月一七日 小山寿 退職
五月一日 伊藤武 就職
八月二三日 山口石太郎 退職
九月一八日 金子泉善 退職
十一月二三日 守屋清治 就職

十二月一日 守矢カネ 就職（実業補習学校雇として）

教員が退職を申し出るたびに、校長は慰留し、それでもだめなときは、村関係者や知り合いに頼んで後任を確保しようと思いました。

校長は、若い教員が退職していく理由も、教職に就きたがらない理由もよくわかっていました。川崎から横浜にかけて、巨大な工場や会社が次々とつくられ、就職先はいくらでもありました。生糸相場も上昇し、農家も大変忙しくなっていました。当然、働いている人に支払われる給料も上昇していました。

そんなときに、教員の給料は、上がっていませんでした。どの市町村でも、支出の一位は教員の給料で、給料の引き上げは困難でした。そのうえ、高座郡は、神奈川県下でも小学校教員の給料が最も低い地域でした。

教育費が過重

一九一七（大正六）年、桜井校長は、橘川広吉村長に、「教員の給料を少しでも上げられないか」と言いました。

村長によると、綾瀬村の教育費は、七年前にくらべて二〇〇〇円以上増えているとのことでした。

綾瀬村の教育費（当初予算）

年 度	金 額
一九一〇（明治四三）年	三九六七円
一九一七（大正 六）年	五一〇六円

その間、児童数は九八名増加しているのに、学級数は一学級しか増やすことができませんでした。

教員の給料を引き上げるより先に、教員をもう一名確保する必要がありました。

綾瀬小学校の学級数と生徒数

年 度	学級数	児童数
一九一〇（明治四三年）	一五	八四四
一九一七（大正 六）年	一六	九四二

教室を増設するにしても、教員をもう一名確保するにしても、今の村にとって大きな負担になると村長は言いました。

一九一七年度の村予算は一万八二四円で、教育費は五二〇六円でした。教育費が村予算の四七％も占めているわけです。しかも、教育費の大部分は教員の給料が占めていました。

このころ、綾瀬村では、村長や助役、学務委員、村議会議員などの人々は、給料をもらっていませんでした。その都度、手当が支払われるだけでした。

校長は、村長に村財政の窮状について聞くと、それ以上、給料引き上げをお願いすることができませんでした。

四月、校長のもとに、師範学校の欠員募集の通達が届きました。昨年も欠員が出て、今年も欠員が出ました。

「そんなに教員の仕事は魅力がないのか」と思わずつぶやいてしまいました。

一月初旬、校長は、藤沢駅から県庁に向かいました。

県庁に着くとすぐ、校長は、県の視学より、「二一月末に、愛甲郡視学として赴任せよ」と言われました。

校長は、「綾瀬小学校でやるべきことがたくさんある」と県の視学に訴え、綾瀬小学校に残れるようにお願いしました。

県の視学は、校長の一〇年間の実績をほめ、ぜひ、それを愛甲郡の小学校の指導で生かしてく

れと言いました。

県の視学に、後任は決まったのかと聞きましたが、「まだ決まってない」とのことでした。

とうとう後任の決まらないまま、十一月二十九日、校長は、愛甲郡視学として郡役所のある厚木町に赴任しました。

十二月二日、ようやく海老名小学校の訓導・石井伴七が、綾瀬小学校の校長として赴任して来ました。

石井校長は、あいさつ回りをしてあわただしく二学期末の行事をすませると、三学期を迎えました。

一九一八（大正七）年一月二〇日、綾瀬村で、新旧校長の歓送迎会が開かれました。教職員だけでなく、村長や学務委員など村の関係者が参加した盛大な会でした。

この席で、校長は、ようやく桜井諗に会うことができました。

年末年始を校長の残した文書を読んで過ごした石井伴七にとって、聞きたいことは山ほどありました。

宴会が始まると、石井校長と桜井諗は、色々なことを話しました。その話に村長も加わりました。

村長によると、全国町村会長・金子角之助の奮闘により、現在開会されている帝国議会で「市町村義務教育費国庫負担法」が審議されており、成立する見通しだということでした。

まだまだわずかだそうです、国の補助が受けられるということは喜ばしいことです。

「これで優秀な教員が確保できる」と校長が言うと、「教員が確保できれば、次は教材や教室だ」と桜井諗が言いました。

村長は、思わず苦笑いしました。桜井諗が言ってきたように教室を増設するだけで、その費用は、村の教育費を上回ってしまうからです。

新しい教育の動き

学力調査

一九一七（大正六）年四月、高座郡役所より学力調査を行うとの通達がありました。四年と六年の国語と算術の学力を調べ、その結果を学校ごとに比較して、今後の指導の参考にするということです。

綾瀬小学校では、学校をあげて国語と算術の指導に力を入れました。遅れがちな児童には、放課後個別に指導したりしました。

その結果、綾瀬小学校は高座郡で上位の成績を占めることができました。このとき、綾瀬小学校と上位を争っていたのが海老名小学校でした。

国語では海老名小学校と綾瀬小学校は互角でした。算術で、綾瀬小学校は、海老名小学校に、わずかの差で負けました。

学年・教科	綾瀬小学校	海老名小学校
尋常科四年・国語	一位	二位
尋常科四年・算術	五位	二位
尋常科六年・国語	二位	一位
尋常科六年・算術	七位	二位

理科教育

七月になって、高座郡内で師範学校教師による小学校理科指導が三回も行われました。

七月二日 藤沢小学校

七月六日 綾瀬小学校

七月七日 上溝小学校

国や神奈川県が理科教育を奨励していたのです。

そのため、神奈川県は郡ごとに小学校を指定し、師範学校の教師を派遣して研究授業と講演会を実施させました。

理科指導の当日、午前七時少し前、綾瀬小学校には高座郡中部の小学校の教員がたくさん集まっていました。

桜井諄は、玄関先で先生方を迎えました。高学年の児童に先生方を教室に案内させました。授業が終わって、授業の研究会が行われました。その中で、師範学校の教師は、さかんに「第一次世界大戦を戦っているドイツやイギリスの科学知識を学ぶべきだ」ということを強調していました。

十一月九日と一〇日には、師範学校付属小学校で小学校理科教授研究会が開かれました。出席した桜井諄は、掛け図や手作りの実験道具を使って、児童を引きつけていく授業に感心しました。

児童が実験に参加し、皆で実験の結果を考え、教師の前で発表するという授業の進め方を初めて見ました。

授業が終わった後、研究会がありました。研究会では、手作りの実験道具と授業の進め方に質問が集中しました。

桜井諄は、研究会終了後、もう一度実験道具を見せてもらい、あれこれ質問しました。付属小学校を出たときは、すっかり暗くなっていました。

一九一八（大正七）年三月下旬、新年度より使われる新しい国定教科書（第三期国定教科書）の趣意書が綾瀬小学校に届きました。

新年度の準備をしていた石井校長は、同封の文書に、新教科書の配本が遅れるかもしれないとありました。

校長は、「またか」とつぶやきました。これまでも教科書の配本が遅れたり、注文した数の半分しか届かなかったことがあったからです。

届いたばかりの趣意書を各学年の担当者に渡すと、校長は、理科の趣意書を読みました。かなり教材の配列が変わっていました。しかも、「空気と水」のように、実験器具が必要なものが増えています。これは大変だと、理科の責任者に研究を進めるよう言いました。

六月には、一〇日より二九日までの間、師範学校で、各郡の教員を集めて理化学講習会が開かれました。

講習を受けた人は、それぞれ、各郡の理科教育の指導者になる人です。

こうして、理科教育に詳しい人が徐々に増えていきました。

一〇月二八日に、高座郡が主催した小学校主席訓導会の席上でも県理科指導員の指導談話がありました。

新しい理科教育が進められるにしたがって、校長は、新しい教材と専門教室の必要性を痛感するようになりました。

新しい体操教育

第一次世界大戦で、ヨーロッパ諸国民との体格差を感じた国は、体操の授業を奨励しました。体操の授業に、器械体操や球技を取り入れようとして各地で講習会を開き、道府県にも通達しました。

一九一七（大正六）年、高座教育会は、各小学校に働きかけて体育主任を任命してもらい、東京高等師範学校で実施される体操講習会に出席させるようにすすめました。

体操講習会に出席した体育主任の報告を聞いた桜井校長は、各小学校の現実には厳しいものだと思います。

鉄棒や平均台といった器械体操の用具どころか、ボールを買う金さえない小学校が多かったからです。

一九一八（大正七）年四月、石井校長は、四月一日に村長に就任したばかりの守山甲子太郎に、なんとか体操器械を設置してもらえないかと頼みました。

村長は、校長に「どの位かかるのか」と聞きました。校長が「五〇〇円ぐらいだろう」と言うのと、「それだけあれば、教員をもう一名雇えるだろう」と村長が言いました。

校長があきらめて帰ろうとすると、村長が止めました。

村長は、「義務教育に対する補助が始まると言っても、まだほんのわずかだし、村の支出が減るわけではない。だから村の支出から出すわけにいかない。みんなに寄付を頼んでみよう」と言いました

村長は、体操器械のことを学務委員や村議会議員に話し、寄付を募ってもらうことにしました。一二月末までに、有志二六一名の寄付五〇〇円が集まりました。

村長からの連絡を受けて、校長は、業者に体操器械を注文しました。

一九一九（大正八）年二月下旬、その工事が始まり、二四日に完成しました。

体操器械が完成すると、高座郡内の小学校の体育主任が見学に来るようになりました。体操主任たちは、「この器械を使って講習会を開けないか」と言いました。

一九二〇（大正九）年の秋、神奈川県は、県下各地で体操講習会を開催しました。

一月一九日、綾瀬小学校で開催された器械体操を中心とした体操講習会には、たくさんの教員が参加しました。

連合運動会

このころ、高座教育会は、北部・中部・南部の三地区に分かれて活動していました。綾瀬小学校は、他の六校とともに中部会に属していました。

中部会は、国の体操奨励を受けて、一九一七（大正六）年ごろから連合運動会を行っていました。この年の会場は綾瀬小学校でした。

*中部七校

海老名・有馬・大和・渋谷・

御所見・座間・綾瀬の各小学校

連合運動会の会場

年 度	月 日	会 場
一九一七（大正六）年	一月 三日	綾瀬小学校
一九一八（大正七）年	一月 七日	座間小学校
一九一九（大正八）年	一月 一日	御所見小学校
一九二〇（大正九）年	一月二三日	大和小学校
一九二一（大正一〇）年	一月二二日	渋谷小学校

連合運動会には、尋常科の五・六年生と高等科の児童が参加しました。陸上競技を中心に、綱引きなどの遊技種目もありました。

連合運動会は、昭和になっても続き、各小学校は激しい競争を繰り返しました。

新しい教育を求めて

一九一九（大正八）年二月七日、小学校令と小学校令施行規則が改正されました。改正内容は次のとおりでした。

- ① 尋常科の三学年以上の国語の時間を減らす。
- ② 四年で、理科を週二時間学習する。
- ③ 五・六年で、日本歴史を週二時間学習する。
- ④ 五・六年で、地理を週二時間学習する。
- ⑤ 五・六年で使うことになっていた理科の教科書を四年から六年の三年間で使う。
- ⑥ 三年の裁縫をなくし、裁縫は四年生以上で行う。

⑦高等科の日本歴史や地理は週二時間ずつ学習する。

⑧高等科の女子の理科の時間を減らす。

⑨高等科の女子は家事科を学習する。

二月九日には、教育関係者の熱望によって、アメリカの新しい教育の担い手であるジョン・デューイが来日しました。

デューイの来日によって、当時「動的教育法」と呼ばれた教育法、現在でいえば課題解決型の教育法が、各地で研究されるようになりました。

小学校令の改正とデューイの来日が重なり、新しい教育を求める動きが高まりました。

六月一四日、師範学校付属小学校で、国史を中心とする教科研究会が開催されました。

研究会は翌一五日も開かれました。参加した石井校長は、児童に考えさせ、意見を発表させるような授業に感心しました。

ぜひこの感動を伝えようと、販売していた研究印刷物と参考図書を買って帰りました。

八月一日から五日にかけて、横浜第一中学校で、小学校歴史講習会が開催されました。高座郡から八人の教員が参加し、毎日、国史の講習と演習が行われました。

この講習会に参加した八人は、高座教育会の国史の教育研究の中心になりました。

教育環境を整備する

年々上昇する教育費に耐える

一九一七（大正六）年以降、綾瀬村の教育費は年々増加していました。

国や神奈川県は、教員の待遇をよくし、教員を確保しようとして、市町村に、教員給料の引き上げを命じる通達をたびたび出しました。

綾瀬村では、そのたびごとに村税を引き上げたり、村議会を開いて対処しました。

綾瀬村の教育費と村予算

年 度	教育費	村 予 算
一九一七（大正六）年	五一〇六円	一万八二四円
一九一八（大正七）年	五六一四円	一万一九六九円
一九一九（大正八）年	七七〇〇円	一万五八八一円
一九二〇（大正九）年	一万九〇七円	二万六四三円
一九二一（大正一〇）年	一万五九七九円	二万七四六〇円

綾瀬村の教育費は、一九二〇（大正九）年に一万円を超えてしまいました。わずか三年で二倍になっているわけです。しかも、この年、教育費が村予算の五〇％を超えてしまいました。翌年はさらに約五〇〇〇円も上昇しました。

いくら、国庫補助が始まったとはいえ、まだわずかでした。その中でやりくりする村長をはじめ村の当局者にとっては大変なことでした。

教室を増やす

綾瀬小学校の教室を増やすことは緊急の課題でした。

石井校長が綾瀬小学校に赴任したとき、尋常科では、一教室に五〇名を超えた所がいくつもありました。

高等科の教室は、男女で一七七名が在籍しているのに、二学級しかありませんでした。

校長は、「男女席を同じにせず」という年ごろなのに、これはなんとかしなければならぬと思いました。

分教場にも問題がありました。綾北・早園・上土棚・吉岡と四つある分教場のうち、上土棚と吉岡は、教室が一つしかありませんでした。

一・二・三年が一つの教室で勉強しているのです。

綾瀬小学校の学級数と児童数

年 度	学 級 数		児 童 数
	尋常科	高等科	
一九一七（大正六）年	一四	二	九四二名
一九一八（大正七）年	一四	二	九五五名
一九一九（大正八）年	一四	二	九六〇名
一九二〇（大正九）年	一五	三	一〇〇四名
一九二二（大正一〇）年	一五	三	九九八名

一九二〇（大正九）年、校長は、守山村長と相談しました。

児童数が一〇〇〇名を超え、高等科も一三〇名を超えという見通しを述べると、村長は、「前年の教育費に匹敵するような工事について、今すぐ答えられない。みんなと相談するから」と言いました。

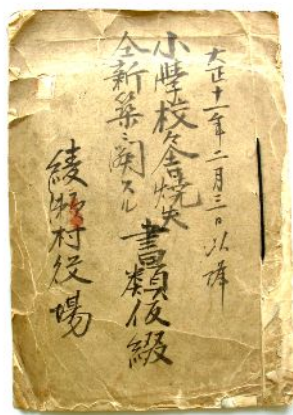
四月三〇日、村長は、学務委員や村会議員を集めて、校舎増築の話し合いをしました。

その結果、三教室分の増築が決まりました。資金は、三年間継続で村民からの寄付によると決まりました。

三年後まで増築を待つことができませんので、当面の資金を県から借りて、すぐに工事に取りかかることが決まりました。

夏より三教室の増築工事が始まり、十一月二〇日に竣工しました。この工事にかかった費用は七三〇〇円でした。村は、これから三年間、村民から寄付を集め、県に返すことになりました。

焼失・新築に関する書類仮綴りの表紙



この年、尋常科で一学級、高等科で一学級増やし、教員も二名増えましたが、教室が間に合わず、唱歌室や裁縫室を利用して授業を受けていた児童が、十一月下旬に新しい教室に移って来ました。

綾瀬小学校の火災

突然の火災

北風が吹き、どしや降りの雨が降っていました。

一九二二（大正一一）年二月三日の午前一時ごろ、綾瀬小学校で火災が起きました。

宿直の先生と用務員さんが気づいたときには、火の手は校舎中に回り、手の付けようがない状態でした。

それでも、用務員さんは、どしや降りの雨の中を飛び出して行き、近所の助けを求めて走り回りました。

宿直の先生は「せめて御真影だけでも」と、燃えさかる校舎の中に飛び込んで行きました。

炎と煙のために、なかなか目的の場所に近づけませんでした。途中、落ちてきた木材のためにけがをした宿直の先生は、動くこともできませんでした。

幸い、火事を知ってかけつけた人たちに発見され、火事の中から救い出されました。

校舎の屋根がトタン葺きであったため、煙突のような働きをして、炎が高く上がりました。

炎を見てかけつけた深谷中、深谷上、吉岡芝原、落合、吉岡などの消防隊の人たちは、口々に「御真影はどうした」と叫びました。

だが、「だめだ」と叫ぶと、学務委員の比留川定吉は、炎の中に飛び込もうとして、近くにいた消防隊の人たちに引き戻されました。

消防隊の人たちは、御真影のあった奉安所の消火から始めました。雨の中、ずぶ濡れになって消火につとめ、なんとか消し止めることができました。

消火が終わると、前村長は焼跡で、御真影の入っていた鉄の箱を必死になってさがしました。見つかった箱を開けると、中にあったはずの御真影は燃えて灰になっていました。

この火災で焼け残った校舎は、一九一二（大正元）年に増築した部分だけでした。最初に火の手が上がった校舎は、二年前に増築したばかりで、借りた建築資金を返し終わっていませんでした。

朝になって登校して来た児童の中には、焼け跡を見て、ただ驚き、涙を流して帰る者や、自分の教室があった場所にぼう然と立ち尽くす者がいました。

広がる支援の輪

綾瀬小学校の火災のニュースは、またたく間に伝わりました。

朝になって、村中の人が小学校に集まり、学校周辺は多くの人々でごったがえしていました。人波をかき分けて、渋谷小学校の増田周吉校長が見舞いに来ました。

焼け残った教室で事後処理に追われていた石井校長を見つけると、早速、声をかけました。

「何か必要なものはないか」と言うと、石井校長は「教科書」とだけ答えました。

綾瀬小学校の児童の多くは、ほとんどの学用品が焼けてしまったのです。筆や硯などの筆記用具だけでなく、教科書や体操着なども教室に置いていたからです。

増田校長は、「わかった、なんとかしよう」と言って帰りました。

午前一〇時には、藤沢より、村山高座郡長が郡視学と書記を連れて、かけつけて来ました。

焼け跡を視察し、校長の話を聞いて、すぐ藤沢に引き返しました。県と善後策を相談するためです。

二月四日、海老名小学校にて、綾瀬小学校救済善後策のため、中部校長会議が開かれました。義捐金を集め、できるだけの援助をしようということが決められました。

早速、渋谷小学校では、綾瀬小学校のために児童用教科書九三四冊（古本）を集め、義捐金を児童より一人一〇銭以下で集金しました。

渋谷小学校の義捐金は、七六円にもなりました。

義捐金は、中部の小学校だけでなく高座郡の南部や北部の小学校からも寄せられ、合計二三校にもなりました。

高座郡の一八カ町村や青年団などからも義捐金が届きました。

寄せられた義捐金のうち、最も多いのは綾瀬村の人や関係者から寄せられたものでした。

村内のほぼすべての家数に相当する九五三人から義捐金が寄せられました。

小学校の教員全員、村職員全員、村会議員、補習学校の生徒有志、青年団の支部、農会、産業

組合、神社仏閣なども義捐金を寄せました。

綾瀬小学校の火事を知った綾瀬村出身者も、次々と義捐金を送ってきました。大和や渋谷といった近隣の町村に住んでいる人だけでなく、大阪や奈良といった遠方に住んでいる人からも届きました。

さらに、国内だけでなく、アメリカのサンディエゴやシアトルからも義捐金が届けられました。義捐金の総額は、二万円以上にもなり、校長や教員たちを勇気づけました。

寄付者概要（現金）

村内一般	九五三人	綾瀬小高等科男性有志	一組	村役場書記	五人
深谷	二七九人	〃 高一男有志	一組	大正一〇年度村会議員	一八人
蓼川	九一人	〃 高等二年生	一人	農会区惣代	三三人
寺尾	二五八	〃 尋常二年生	一人	村青年会・支部	四
吉岡	一三九人	〃 尋常科四年生	一人	上深谷綾瀬信用購買販売組合	一
本蓼川	三七人	〃 尋常科五年生	一人	信用購買販売蓼川共同組合	一
上土棚	八九人	〃 尋六男有志	一組	深谷信用購買販売組合長	一人
小園	六〇人	蓼川尋四男有志	五人	市外（綾瀬村出身）	四二人
早川	一三九人	補習生		川崎	一人
綾瀬村	四人	深谷中村補習生男子部	一団体	八王子	一人
学校	二五人	早川補習生有志	一組	中郡平塚町	二人
小学校職員一同	一九人	綾瀬実業補習生女子部	一団体	〃 大野村	一人
小学校長	一人	深谷上実業補習生	一五人	瀬谷村	一人
小学校訓導	二人	本蓼川実業補習生男子部	一団体	鎌倉郡	二人
小学校代用教員	二人	大正一〇年度常設委員・学務委員	二二人	横浜市	一四人
吉岡分教場訓導	一人	村職員	七人	海老名村	一人
生徒		助役	一人	渋谷村	二人
綾瀬小高等科一年生	六人	収入役	一人	戸塚町	二人

大坂	一人	麻溝村	一	寄付金合計 二二、一七八円三五銭	
東京	八人	大野村	一		
県外	二人	田名村	一		
瀬谷村	二人	溝村	一	住所等不明	一人
座間村	四人	大沢村	一	吉岡報徳社・済運寺・蓮光寺	
御所見村	七人	相原村	一	長龍寺・長泉寺・龍洞院・報恩寺・ 吉岡報徳社・済運寺・蓮光寺	
小出村	一人	渋谷村	一	報恩寺・吉岡報徳社・大法寺・ 長龍寺・長泉寺・龍洞院・報恩寺・ 吉岡報徳社・済運寺・蓮光寺	
藤沢町	六人	有馬村	一	神社仏閣	一〇
大和村	三人	茅ヶ崎町	一		
茅ヶ崎町	三人	藤沢町	一	大塚児童保護者(海老名村)	六人
渋谷村	九人	六会村	一	高鎌新人会	一
有馬村	五人	海老名村	一	大和村役場使丁	一人
海老名村	一〇人	大和村	一	麻溝村(匿名)	一人
厚木町	一人	御所見村	一	麻溝青年団	一
横浜市	四人	町村寄付	一八団体	麻溝村処女会	一
〃 吾妻村	二人	米ワシントン州シアトル市	一人	瀬谷小学校生徒	二人
中郡 須馬村	一人	〃 サンディエゴ	二人		
鎌倉郡	一人	米カリフォルニア州	一人	座間村	一
市外	七人	外国	四人	新磯村	一
東京	一人	奈良県	一人	寒川村	一
横須賀市	十三人	千葉県	一人	小出村	一

火災の責任をとる

雨の中、ずぶ濡れの石井校長が綾瀬小学校に着いたとき、火事は消し止められていました。焼け跡でしよう然とたたずむ宿直の先生の姿を見て、校長は、「自分の責任だ」と思いました。

午前一一時半ごろ、藤沢警察署より二名の警察官が火災の実地検証のために来校しました。校長は、警察官の質問に答えた後、何度も「自分に責任がある」と言いました。

午後二時ごろには、県庁より二名の役人が到着しました。県庁の役人は、火災による被害について質問した後、今後の対策について、校長や村長に質問して帰りました。

この日の午後、今後の対策を話し合うため、学務委員八名と村会議員一七名が参加して、協議会を開催しました。守山甲子太郎村長とともにこの会議に出席した校長は、皆にあやまり、自分に責任があることを強調しました。

しかし、校長や先生方を責める人は一人もいませんでした。

会議では、教室として借りる場所、机や教材をどうするかなどを相談しました。話しが決まると、代表が借りる場所へ交渉に行きました。

二月四日、綾瀬小学校は臨時休校になりました。どうやって焼け跡を整理し、授業を再開するかを皆で検討するためです。

この日、早朝から、各集落から選ばれた消防隊の人たちが小学校に集まり、焼け跡の整理をしました。校舎だけでなく、庭木も燃えてしまったので、片づけは、なかなかはかどりませんでした。

校長は、片づけに来てくれた人たちにあいさつをすませると、急いで藤沢警察署に向かいしました。警察署で、火事を防ぐためにどんなことをしてきたとか、どんな原因が考えられるかなど聞かれました。

二月五日、この日も臨時休校になりました。昨日に続き、小学校の授業をどのように再開するかを協議するために、学務委員や村会議員と常設委員が午前九時に集まりました。二月六日から授業を再開することはすぐ決まりましたが、どうやって校舎を再建するかについては、莫大^{ばく}な再建費用をどうやって調達するかで意見が分かれ、なかなか決まりませんでした。

この後、校長は、職員会議を開きました。明日からの授業の進め方を話し合った後、校長は、「この火災の責任は自分にある」と言い出しました。

先生方は、「とんでもない。自分たちにも責任がある」と言って、校長だけが責任をとることに反対しました。

長時間の話し合いの末、全員で進退伺を出すことになりました。

二月六日、早朝より先生方が出勤し、灰になってしまった御真影のための式場づくりをしました。児童全員が登校し、一一時半より、荘厳な式が始まりました。式は、早川と蓼川の神主によって進められ、午後一時半に終了しました。

この日の午後、藤沢警察署より警察官が二名来ました。二月二日の晩行われた農事講習会と褒章式の後の火の始末について詳しく聞きました。火事の直接原因を調べるためでした。

二月一〇日、神奈川県は、綾瀬小学校の先生方の進退伺を、責任者を除いて却下しました。神奈川県は、文部省とも相談して、二月二五日、責任者の処分を決めました。

校舎再建を決める

二月三日の午後、村会議員と学務委員は、六日よりの授業再会を決めました。

到着した県教務課の人と相談のうえ、農家の蚕室や寺、焼け残った教室を仮教室として使うことにしました。

二月六日、綾瀬小学校で仕事をしていた守山村長は、仮教室に向かう児童の姿を見て、なんとかしてでも校舎を再建しなければと思いました。

一日でも早く校舎の再建を決めたい村長でしたが、この後しばらくは、たくさん火事見舞いの対応のため、学校と役場を行き来しながら仕事に追われていました。

二月一二日、よく晴れた日曜日、焼け残った綾瀬小学校の教室に、村会議員と村長、助役が集まり、校舎再建について話し合いました。

話しの中心は、村予算の二年分はかかるだろうと思われる建築費のことでした。校舎再建に反対する者はいませんでした。どうやって費用を捻出するか、なかなか意見が出

＊常設委員Ⅱ地域から選出され、村の仕事をする。

ませんでした。

守山村長は、「できそうなことすべて考えてみよう」と言いました。長時間の議論の末、村会は次のような結論を出しました。

- 一、村の基本財産をとりくずす。
 - 二、学校備品は新しくつくる。
 - 三、机やその他木材でつくるものは、村で設計し競争入札にする。
 - 四、校舎を建て直す敷地の基礎工事は、村民の労力奉仕で行う。
 - 五、大正一一年度に、全世帯を対象として一回限りの割当寄付を集める。
- 総額一万円をめざし、徴収期日は七月二〇日にする。
- 五、郡役所や県庁へ借入金等の交渉に行く人を次の五人とする。
- 守山甲子太郎、多田重一、比留川定吉、田中恭助、斉藤定八

午後には学務委員と常設委員も話し合いに加わり、村会の結論を承認しました。これにより、校舎再建がほぼ決まりました。

二月一四日、守山甲子太郎、多田重一、比留川定吉、田中恭助の四人は、藤沢の郡庁に行き、村会の結論を伝えました。

あわせて、郡庁に、校舎の設計と借入金について協力をお願いしたところ、このまま、県庁に行くようにすすめられました。

県庁に着くと、井上知事にも会うことができ、全面的な協力を約束してもらい、綾瀬村に帰りました。

こうして、綾瀬小学校の校舎再建が決まりました。

農家を借りて授業再開

あらゆる物が燃えた

二月三日の火災で、綾瀬小学校はあらゆる物が燃えてしまいました。児童用の机やイス、教卓、職員室の机とイス、黒板、オルガンといった備品だけでなく、児童が学校に置いていた学用品も大量に燃えてしまいました。

焼失した学用品の種類と数(主なもの)

学用品名	数	学用品名	数
硯	六五七	単衣	三八
墨	五七四	羽織	一五
筆入	三九五	運針布	一五七
紙入	一四八	体操襦袢	一四
石盤	三三	体操猿股	一七
綴方帳	四六九	体操用たび	七一
コンパス	三六八	体操帽	八三
三角定規	四四六	体操はかま	一二
筆洗	三二七	字引	二四
菊皿	三二七	国史	二九
絵具	三五六	算術五	六六
色鉛筆	一九	書方尋四下	九九
曲尺	四三一	尋常修身四	二九
鯨尺	一五七	高等科地理一	四〇
裁縫箱	一六五	高等科地理二	四一
		高等科読本二	三

これだけの物が燃えてしまうと、なかなか授業を再開するのが難しいのですが、臨時休業にしたのは、二月三日（金）と二月四日（土）の二日間だけでした。それでは、どうやって授業を再開したのでしょうか。

農家を借りて授業を再開

まず教室をどうしたのでしょうか。

二月三日午後に、学務委員と村会議員が話し合って、ともかく授業を再開することと、仮教室として、農家や寺院の建物を借りることを決めました。

二月四日午前、石井校長は、職員会議を開いて、本校と仮教室への児童の配置を決め、保護者にも通知しました。

仮教室と児童の配置

種類	場所	配置児童
本校	二教室	尋常科一・二・三年 高等科一年男子
農家	鈴木九左衛門 山下定吉	尋常科四年男子 尋常科四年女子
	高島慶助 見上佐七	尋常科六年男子 尋常科五年女子
	見上勝兵衛 多田重一	尋常科六年女子 尋常科五年男子
	綱島茂太郎	高等科二年男子
寺院	大法寺 長龍寺	高等科一・二年女子 実業補習学校女子



石油箱を使った仮教室での授業（綾瀬小学校蔵）

農家から借りた建物の多くは、蚕室で、板の間でした。寺院の本堂も板の間です。

村会議員が、「冷たくて大変だろう」と心配して、^{むら}苳を買って来て敷こうということになりました。

平出良助と大久保卯兵衛の二人が町田まで行き、買い求めてきました。

二月六日早朝、大きな荷物を背負った児童が、綾瀬村各所に見られました。

高学年の児童は自ら、低学年の児童は父兄が、机代わりの石油箱を背負って仮教室に向かいま

した。
どの教室も石油箱を並べ、児童が座ると、いっぱいになりました。まるで、膝と膝がぶつかり
そうでした。

そのうえ、仮教室は、明かり取りの窓が少ないので、晴れの日なのに薄暗く感じられました。
お互いの顔が確認できたのは、しばらくたってからでした。

児童が苳の上に座布団を敷いて座り、ざわめきが収まると、手作りのテーブルの前に座ってい
た先生が話しを始めました。

今後の授業をどうするとか、何を用意するとか、話は延々と続きました。

話を聞いている児童だけでなく、先生までも震え出しました。仮教室が大変寒かったからで
す。

仮教室の中でも、農家の蚕室は隙間だらけでした。蚕が病気にならないように、わざとそうし
ていたのです。

蚕室に目張りをして授業を始めるだけの時間的余裕もなく、春まで震えながら授業を受けまし
た。

この日、授業を二時間で打ち切り、先生と児童は、すぐ本校に向かいました。

一一時半より、焼失した御真影のための儀式に参加するためです。

式は二時間も続き、午後一時半ごろ終わって、ようやく帰ることができました。

ないないづくしの授業

仮教室には、黒板がありませんでした。

掛け図や地図などの教材もなく、筆や硯などの文房具や教科書を持っていない児童もいました。

「学用品をなんとかしよう」という声が高まりました。

教科書は、渋谷小学校や御所見小学校などから、古い教科書を贈ってもらうことになり、めどが立ちました。

文房具を焼失した児童のうち、新たに用意ができそうもない児童には、村から贈ろうということになりました。

二月一六日、峰尾景治、山口八郎左衛門、笠間長作、近藤先生の四人は、文房具などの学用品を購入するため、藤沢の川上商店に行きました。

その種類と数が膨大だったため、すぐにはそろわず、二月二〇日、二四日、三月六日の三回に分けて、綾瀬村に運ぶことになりました。

綾瀬村が購入した学用品

学用品名	数	学用品名	数
硯	二七四	コンパス	二九六
墨	二二一	三角定規	三五四組
石盤	一三	綴方帳	四六九
筆洗	二二六	雑記帳	六八〇
菊皿	二〇二	半紙	七〇〇帖
絵具六色	一一〇	筆	七五〇
同六色	二〇〇	筆入	一五七
六色チヨーク	二〇六	紙入	一三五
六色鉛筆	八	そろばん	二三
クレヨン	一一		

三月下旬、ようやくなれた仮教室を離れることになりました。
養蚕の作業が始まるので、借りていた農家の蚕室を返すことになったからです。
学務委員は、改めて村中をさがし、次のような場所を借りることにしました。

仮教室の移動

返した場所	四月から借りた場所
鈴木九左衛門 山下定吉 高島慶助 見上佐七 見上勝兵衛 綱島茂太郎	多田重一の蚕室 木村久司の新宅 岡田豊栄の居宅 岡田豊栄の蚕室 大法寺 長龍寺

児童の発想を大切にした授業

四月になって、児童は、それぞれ一学年進級し、新しい仮教室に移って行きました。
教科書や真新しい文房具を手にした児童が、仮教室に集まって来ました。

集まった児童は、口々に、「授業が楽しい」とか、「次が待ち遠しい」と言うようになりました。
先生の授業方法が変わってきたからです。

教室に入って、先生が「静かに」と言わなくても、先生が何かを言おうとすると、児童は、何
が始まるのか期待して、静かに待つようになりました。

午前八時、一校時目の授業が始まりました。

三年生は、国語の授業でした。

先生が「ねこ鳥」と大きく書いた紙を見せました。



尋常小学国語読本 巻三・巻四
(文部省・昭和三年翻刻発行)

「どんな鳥だろう」と先生が言うと、「わかりません」とか、「こんな鳥だろう」とか、さまざまに児童の答えが返ってきました。

先生は、穏やかに、児童の答えを聞いていました。

しばらくたって、正解が出てこないのを確認すると、先生は、「ねこ鳥」がふくろうのことだと教えました。

早速、児童から「ふくろうって、どんな鳥ですか」という質問がありました。

先生は、その質問にすぐに答えなくて、「だれか知っている者はいないか」と言いました。何人もの児童が手をあげました。

先生は、一人一人の児童の答えをゆっくり聞きながら、手をあげた全員の答えが終わるのを待ちました。

答え終わったのを確認すると、先生は、テーブルの下から、一枚の紙を取り出しました。

先生が、昨夜、図鑑を見ながら書き写したふくろうの絵でした。

「わー」という歓声が上がりました。

先生は、みんなが静まるのを待って、次の質問をしました。

「何で、ふくろうのことをねこ鳥と言うのでしょうか」

児童は、ちよつと困った顔をしました。

わからないからです。

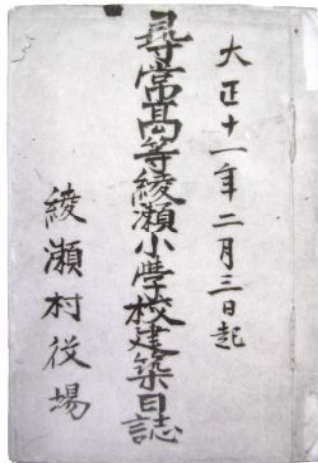
先生は、国語の教科書をひろげるように言いました。教科書にある「フクロフ」という文を読んで、どんなことを言っているか考えるように言いました。

児童は、一斉に教科書の「フクロフ」という文を読み始めました。読めない字があつて困っている児童がいたり、隣の児童が教えていました。

しばらくすると、児童の中には、三月に支給されたノートに小さな字で、新出漢字を書いている者や自分の考えを書いている者がいました。

すし詰め教室ですから、先生は教室の中を十分に回れません。

建築日誌の表紙



それでも児童は、一生懸命勉強していました。

総力をあげて校舎再建

村民の労力奉仕

二月七日、学務委員の比留川定吉は、守山甲子太郎村長を助けて、火事見舞いの人のあいさつを受けるようになりました。村長があまりにも忙しそうだったからです。

この後、他の学務委員や村会議員も、忙しい村長を助けて見舞客への対応や答礼、学用品の購入などのために働きました。

二月二五日、村会議員、学務委員、常設委員の合同会議が開催され、当面の工事日程について話し合いました。

校舎再建の予算のめどが立たないので、慎重な発言が相次ぎました。

比留川定吉は、「これまでたくさんの方が見舞いに来て、あれだけ励ましてくれている。ともかくできることから始めよう」と言いました。村長も、「建設資金のことは、できるだけ早くめどを立てよう」と言ったので、話し合いは急に活発になりました。

話し合いの結果、地区ごとに人を出して、焼け跡の片づけと校地の整理から始めようと言うことになりました。

当面の工事監督として、常設委員の綱島善次郎、村会議員の多田重一、峯尾徳太郎の三人を選びました。

三月二日早朝、深谷地区から一〇名の方が、鍬くわや鋤すき・もっこなどを持って小学校に集まり、村民の労力奉仕が始まりました。

村長は、集まった人々を前にして深々と頭を下げ、「よろしく頼む」と言いました。集まった人々

は、それに元気に応え、工事を始めました。
 この後、すべての地区から協力者が出て、焼け跡の植木の始末、焼け跡の整理、地均し、地固めなどの基礎工事をしました。

賦役人夫

集 落	日 数(日)	人 員(人)	集 落	日 数(日)	人 員(人)
深谷中部	一〇	一〇四	蓼川	九	一四六
深谷中	七	九一	本蓼川	三	四〇
上深谷	二	三四	上土棚	五	六五
深谷上部	一	三八	寺尾	二五	一八八
深谷大上	六	四七	小園	六	八二
深谷上	四	五五	早川	一〇	九六
深谷鶴島	一	一三	吉岡	八	一二九
			落合	二	五四
			合 計	九九	一一八二

(大正十一年二月三日起 尋常高等綾瀬小学校建築日誌)より作成

三月六日、村長は村役場に顔を出すとすぐに、県庁に向かいました。小学校の建築資金のめどを立てるためでした。

建築資金は、村の年間予算の三倍以上になるだろうと予想されました。寄付や村有財産の処分
 で調達できるのは全体の半分にしかすぎず、村債がどうしても必要でした。

県庁でそのことを訴えると、担当者に、「村債には同意するが、国ともよく相談してほしい」と
 言われ、この日の午後、村長は東京に向かいました。

翌日、国の担当者に面会した村長は、村の窮状を訴え、村債についてお願いして帰郷しました。

建築計画が決まる

四月一日、比留川定吉は、守山甲子太郎に代わって村長に就任しました。

比留川定吉にとつて、三回目の村長就任でした。二期目を辞めた後、郡会議員や学務委員を務めていました。それらをすべて辞めて村長に就任しました。

村長は、一日でも早く小学校を再建したいと思いましたが、課題がたくさんありました。

建築資金のめどがまだ立っていないことが、一番の問題でした。仮に資金が集まったとしても、村の現状を考えれば最少の資金しか調達できないだろうから、それを補うために何をしたらよいかを考える必要もありました。

「資金のめどが立ってから工事を始めたのでは、児童を長く待たせることになるのでかわいそうだ」。村長の悩みは尽きませんでした。

四月一日、村長は思い切って小学校再築地鎮祭を執行しました。午前一〇時、小学校には村会議員、学務委員、常設委員に学校職員と児童が集まり、厳かな式が行われました。

式終了後、村長と石井伴七校長は連れだつて寒川神社まで行き、工事の完成をお願いしました。

一三日、村長は、朝早く県庁に向かいました。校舎の設計をお願いするためです。

すでに県の了解を得ていましたので、必要な条件を書き留めた書類を持って行きました。その際、県の担当者に村債のことを聞いたところ、「ほぼ大丈夫だろう」と言われ、ホッとして帰ることができました。

一九日、綾瀬村会は、小学校建築委員を三〇名選びました。三〇名の中に、三月まで村長を務めた守山甲子太郎も含まれていました。さらに、守山甲子太郎は学務委員にも選ばれました。

村長は、選ばれた三〇名に向かって「よろしく頼む」と言いました。三〇名は「まかせておけ」と明るく答えました。みんな、これまでも綾瀬村のために、村長と苦労をともにしてきた者ばかりでした。

五月六日、村長は、小学校の校舎設計書を受け取るために県庁に向かいました。設計書の細部

の説明を受けた後、県の担当者から、「村債について東京勧業銀行と話し合ってください」と言われ、大喜びで帰りました。

五月一日早朝、村長は東京に向かいました。東京勧業銀行で村債について相談するためです。東京に到着した村長は、銀行で村債の総額や返済方法について話し合い、夕方帰宅しました。

翌日から、村長は建築委員と建築計画や資金のやりくりについて話し合いました。わからない点が出てくると、最近工事を行った近隣の小学校に出かけて話を聞き、計画を練り上げました。

六月二〇日、村長は綾瀬村会に、小学校の建築計画や村債について提案しました。村会は、村長の提案どおり了解しました。翌々日の建築委員会でも建築計画を話し合い、建築工事の常務委員を選びました。常務委員には、村会議員より、近藤弥助・笠間泰助・峰尾景治の三名が選ばれ、建築委員から、綱島善次郎・守山甲子太郎・多田重一の三名が選ばれました。

二三日以降、村長は小学校建築書類提出のため、藤沢の郡役所や県庁に足を運び、県の許可を取り付けました。

七月一七日、村長は村会と建築委員会の合同会議を招集し、建築工事の具体的内容を話し合いました。その結果、次のように決めました。

一、建築工事を次の五つに分け、入札で業者を決める。

コンクリート工事

木材一式

大工工事

建具工事

トタン屋根葺き

二、工事に必要な砂利は、七月二〇日より地区ごとに日を決めて、一戸につき石油箱二杯分を社家や河原口から運ぶこと。

建設工事が始まる

七月二〇日早朝、上土棚地区で荷車を引いたり、もっこを持ったおおぜいの人々が、西に向かう姿が見受けられました。

この日から、地区ごとに日を決めて、砂利運びを始めたからです。一戸当たり石油箱二杯分の砂利を有馬村の社家や海老名村の河原口から小学校まで運ぶことになっていました。

猛暑が続く中で、往復一〇キロもの道を運ぶのは大変なことでした。地区ごとに出発する日が決まっていましたので、道が混雑することはありませんでしたが、重い荷物を運んで、歩くたびにほこりがたつ道に行くことは、つらいことでした。

たちまち、小学校には砂利の山が築かれました。砂利を運んで来た人が一息入れようとすると、校庭の反対側では、これも地区ごとに協力者が出て地固めをしており、大きな声が聞こえてきました。

砂利運びは月末まで続き、砂利の山は地固めに来た人が見上げるほどの高さになりました。

八月一日午前八時、比留川村長は守山甲子太郎や綱島善次郎たちとともに、紋付きはかま姿で役場の入り口付近に立っていました。この日、小学校の建築に使われる木材の入札が行われるからです。

入札に参加する材木商は、午前中は三名しか来ませんでしたので、村長をはじめ関係者は大変心配しました。午後になって入札者が増え、最終的に一九名になりました。

木材の入札の結果、藤沢町の岩沢亀之助が一万七八四五円で落札しました。この金額は、綾瀬村が予定していた価格より四六五円も安く、村長はすぐさま岩沢亀之助と契約しました。

八月一〇日、ひどい暑さの中で大工工事とコンクリート工事の入札が行われました。どちらの入札も村の予定価格にほど遠く、不調となりました。

村長は、改めて入札する旨を入札者に言いましたが、入札者は、だれも帰ろうとしませんでした。入札者の中から、「村の予算もあろうから、村の予算の金額で指名してほしい」という声があ

がりました。村長はもつともだと思い、この日の立会人にも相談して、村から指名することを決めました。

結局、矢部吉太郎が大工工事を五八〇〇円で引き受け、重森富士松がコンクリート工事を六五〇円で引き受けることになりました。

尋常高等綾瀬小学校建築工事契約

工事名等	契約年月	契約金額	備考
器具新調工事	大正一一年三月	三五八〇円	生徒用机・腰掛 各三五〇脚 事務室用テーブル 一四脚、教室用テーブル 一三脚、本箱 一四個、簿冊用本箱 四個、黒板 二〇枚、小黒板 二六枚、硝子戸棚 四個、教壇 二六枚
建築工事（木材）	大正一一年八月	一万七八四五円	
建築工事	大正一一年八月	五八〇〇円	本館 一三三坪七合五勺 玄関 三坪 付属昇降口 一二坪 教室 二二〇坪 付属昇降口 一六坪 便所 二二坪 渡り廊下 三六坪
建築工事（セメント工事）	大正一一年八月	六五〇円	
建築工事（亜鉛屋根葺）	大正一一年一〇月	七一〇円	

九月一三日、コンクリート工事が始まりました。校舎の基礎をつくる大事な仕事です。

村長は、工事を引き受けた業者に^{むしろ}礎を提供することにしました。コンクリートを固めるときに使う礎ですから大量に必要です。業者が考えていた金額より大幅に低い金額で引き受けてもらった以上、礎は支給しようと考えました。家ごとに一枚以上の礎が集められ、たちまち小学校に礎の山が築かれました。

この日、村長は、綱島善次郎、多田重一、近藤弥助、笠間泰助、峰尾景治などとともに、工事の開始を見守った後、今後の工事について話し合いました。

その結果、綱島善次郎、多田重一の二人が常務監督として務め、それ以外の者が順番監督を務めて、工事の監督をしていくことを決めました。

翌日から、綱島善次郎、多田重一の二人は、毎日のように建設現場に出向き、監督を務めました。

一〇月二五日、南校舎の建設が始まりました。北校舎は少し遅れて二七日に建設が始まりました。校舎建設を二つの大工のグループに分けたので、競争で建築が行われました。みるみるうちに校舎の形ができ、十一月六日にはトタン葺き工事が始められました。

トタンは、建築委員が各地に価格を問い合わせ、村長が自ら業者まで出かけて注文してきたものでした。

十一月一日、壁付け（左官）工事も始まりました。ようやく砂利の山がなくなったと思ったら、今度は壁に使う土とワラの山ができました。

校舎の建築、屋根葺き、壁付けの三つの工事が同時に行われていましたから、業者同士の小さな衝突は絶えずありました。そのたびごとに、村長や綱島善次郎は仲裁に入りました。

十二月になって、当面の建設資金が足らなくなり、村長は、あわてて神奈川農工銀行に行くこともありました。

十二月二七日、校舎の建築工事がほぼ終了したので検査をしました。この日から、教室のドアや窓などの建具の工事が開始されました。

村長は、教室が考えていたより暗くなっているのを見て、教室と廊下の境にガラス窓を付けることを考えました。早々業者と交渉して、業者の宿泊費を村が負担する代わりに、契約どおりの金額で工事してもらうことにしました。

工事は大晦日まで続き、小学校の校舎がほぼできあがりました。

校舎が完成する

一九二三（大正一二）年一月二日、比留川村長は村役場に出勤しました。すでに、綱島善次郎、多田重一、峰尾景治の三名が来ていました。今日から工事が再開されるからです。

この日から工事を再開して、二月一日の落成式まで急ピッチで工事が進められました。

四日、大工工事と壁付け工事が再開されました。教室に黒板が取り付けられ、学校らしくなってきました。

六日、尋常科四年以上の児童を使って、机、イス、そのほかを新校舎に運び入れました。

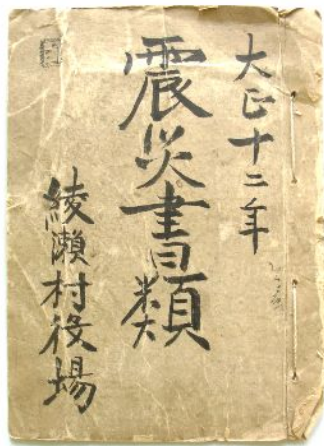
八日には、新校舎での授業を開始しました。授業が始まったと言っても、工事が終了したわけではありませんでした。授業中もあちこちから工事の音が聞こえてきますし、校庭にはさまざまな材料が置かれていました。教室によっては窓が付いてないとか、ドアができていない所もありました。壁も十分乾いておらず、押したら穴ができそうでした。

一月一九日になって、渡り廊下の工事が始まりました。村長は、これでようやく計画どおりの校舎になると言いました。ところが、その村長が二〇日になって急病で倒れてしまいました。

村長急病の報を聞いた村の人々は、大変心配しました。村長は、これまでも二度倒れましたが、そのたびに回復して仕事に就いていました。しかし、今回はだれも見ても重病でした。村長は、病気の重さを自覚して、ついに二二日に辞表を提出しました。

村長が倒れた後も、工事は続けられました。工事は、常務監督の綱島善次郎や多田重一たちと専務監督の笠間泰助の指揮の下、着々と進められました。

一月二五日、小柳勝一助役は村会議員と建築委員を集めて、落成式について話し合いました。この話し合いで、村人を招くだけでなく、お世話になった人をすべて招こうということになりました。また、協力をいただいた高座郡中部の小学校の児童には、お礼の気持ちをこめてノートを贈ることを決めました。寄付を寄せてくれた小学校には、運動用具一式を贈ることも決めました。



震災に関する綴り

二月二日、この日は火災から一周年に当たりました。小学校の男性教員は、完成間近の校舎を守るために、徹夜で警備しました。

二月一日が近づく、建築工事は、なお一層急速に進められました。なんと少しでも工事に間に合わせようと、皆必死でした。

二月九日に、青年団の手で小学校に式のための緑門が建てられました。翌日、小学校に建築委員が全員集合しました。明日の落成式の準備をするためです。校庭や校舎の中を整理し、会場の準備をしました。午後からは、石井校長をはじめ先生方や児童まで準備のために働きました。

二月一日は、よく晴れた日でした。午前一〇時より落成式が行われ、たくさんの人が祝辞をよせ、完成を祝いました。式終了後、小柳助役はたくさんの人と祝杯をあげました。

三月五日、小柳助役は、村長に就任しました。

関東大震災で壊れた

昼の大地震

一九二三（大正一二）年九月一日、小柳勝一村長は、大雨の中、村役場に出勤しました。出勤の途中、この春完成した小学校を見るのが楽しみでした。

新校舎で小学生が楽しそうに勉強しているのを見ることは、村長にとってこのうえない喜びでした。

役場に着き、早速仕事にかかりました。たまった仕事を片づけているうちに雨がやみ、一〇時過ぎには快晴となりました。

昼になり、役場の職員と話をしていると、突然大きく揺れ出しました。役場の屋根が大きく揺れ、机や棚のものが吹っ飛びました。

村長は、なんとか外に出ようとしたが、揺れがひどく、立ってられませんでした。ようやく机のすき間を見つけ、はって土間まで行くと、また、大きな揺れがきました。

揺れがなかなかおさまらず、「このまま死ぬのでは」という気持ちになりました。

村長は、揺れが一瞬小さくなったとき、玄関から飛び出し、庭の大きな木にしがみつきました。ホッとして村長が周りを見わたすと、役場の職員は裏の林に避難して無事でしたが、隣の家が倒壊しているのを見て、ぞっとしました。

幸い村役場は倒壊をまぬがれました。村長は、役場の職員を集め、火の元すべてに水をかけさせ、たとえ役場が倒れたとしても火事を出さないことを確認して、村内を巡視するため自転車で役場を出ました。

綾瀬村の被害

小柳村長が役場から本蓼川方面に向かうと、沿道の民家の大半が倒壊し、惨状は目も当てられないありさまでした。

本蓼川に入ると大きな木々が倒れて道をふさぎ、橋は落ちていました。道はあらゆる所に亀裂が入っていました。亀裂が三〇センチを超える所で、村長は自転車と下駄を近くの家に預け、道ではない所を抜けて別な道に出ました。

自宅のある蓼川に入ると、多くの人が集まって大騒ぎをしているのに出会いました。知り合いの一人がつぶれた家の下敷きになっていました。集まった人で助け出そうと上に載っているものを片づけましたが、すでに亡くなっていました。

村長が自宅に着くと、母屋は傾き、土蔵は崩れ落ちていました。取り入れ間近の蚕は全滅していました。

余震がたびたび起こったので傾いた母屋にいられず、庭に竹で柱を立て、板戸を竹の柱に縛りつけ壁とし、天井は藁を張って雨よけとした仮屋で一晩過ごしました。



倒壊した校舎（綾瀬小学校蔵）

翌日、自宅の片づけを家族にまかせた村長は、急いで役場に向かい、職員に指示をしてすぐに被害調査に向かいました。

どこへ行っても被害がひどく、筆舌に尽くしがたいほどでした。後日まとめた調査結果によると、被害は次のようなものでした。

綾瀬村の約一五三〇戸のうち、一一〇〇戸が全壊し、四三〇戸が被害を受けていました。

村の建物では火葬用の窯と小学校が全壊し、四つの分校も大きな被害を受けました。綾瀬小学校は、工費五万円以上をかけて、この春に完成したばかりでした。小学校の校庭には、幅二メートル以上、長さ数十メートルの亀裂が入り、東側の大半が陥没していて大変危険な状態でした。小園の子ノ社、早川の五社神社、吉岡の神明社、落合の稻荷社、深谷の深谷神社、寺尾の報恩寺など、村の主だった寺社も全壊してしまいました。

不幸中の幸いといえば、村の中で火災が起きなかったことでした。

綾瀬村の震災被害

人		家畜	家屋		
死亡	負傷	合計	死亡	全壊	半壊
一五	三五	五〇	五	一一〇〇	四三〇
					合計
					一五三〇

臨時休業一カ月

綾瀬小学校は、九月一日の大震災によって用務員室及び物置と二カ所の便所を除いて校舎がすべて倒壊してしまいました。

小柳村長や石井校長は、一日でも早く小学校を復興したいと考えましたが、村民の多くが雨露

をしのぐ場所すら確保できていない状態では、とても無理だとあきらめざるをえませんでした。余震が少なくなった四日になると、食料や生活必需品の配給が始まり、村長は大変忙しくなりました。

村長は、村役場の職員や小学校の教員にお願いして、災害の調査や救護に当たらせました。さらに、大量の労力が必要になりそうときには、青年団や在郷軍人会にお願いして仕事に当たってもらい、当面の復興に力を注ぎました。

さまざまな仕事が一息ついた八日、村長は学務委員会を招集して、小学校を月末まで休業することを提案しました。学務委員の一人でもある校長も、「児童の生活が落ち着くまで待とう」と言い、休業が決定しました。

九月二〇日、村長は綾瀬村会を招集して、次のような提案をしました。

- 一、綾瀬村臨時震害復興部を設ける。
- 二、各地区ごとに幹事及び委員を置き、救助・衛生・学事・勸業その他災害復興に関する事項に当たる。

村会議員たちも賛成し、早速人選に入り、幹事及び委員には村会議員や常設委員、学務委員の中から四三名が選ばれました。

二一日、綾瀬村臨時震害復興部が発足し、復興のために本格的な活動を始めました。

二五日、小学校に児童が召集されました。この日は、青年団も召集され、久しぶりに小学校に人があふれました。本格的な片づけを前に、がれきの中から机やイスを運び出すのが目的でした。おおぜいの人を前にして、校長は、「ともかく事故のないようにしてくれ」と言いました。取り出された机やイスは、すぐ近くにある深谷神社の境内に運ばれて行きました。

二八日から、全壊した小学校の片づけが始まりました。青年団や小学校の教員、役場の職員など多くの人が参加しました。

二九日には、相原村青年団員五三名が校舎の片づけに協力するためやって来ました。さらに、

バラック建ての仮校舎
(綾瀬小学校蔵)



三〇日と一〇月二日には、大和村青年団一一一名が来村し、片づけに協力してくれました。

仮校舎をつくる

一〇月一日、深谷神社に机とイスを並べて授業が再開されました。

児童は、元気に登校して来ました。教科書やノートをなくした児童が多く、先生方は何から手をつけていいか困ってしまいました。しかも、いつ天候が変わるかもしれない中で授業をしていると、落ち着きませんでした。

視察に来た小柳村長を見て、石井校長は「なんとかしてほしい」と頼みました。村長は「三日の復興部の会議で検討してみよう」と言いました。

三日、村長や校長も参加して復興部の会議が開かれました。この会議で、当面必要な工事については次のように決まりました。

- 一、本校に、仮校舎としてバラックを建てる。
- 一、大破した分校を修理する。
- 一、以上の費用として三〇〇〇円を見込み、全額補助金でまかなう。

これで仮校舎の建設が決まりました。このころ、郡長に提出した書類によると、仮校舎は、「トタンで屋根をつくり、土間にイスを並べ、膝の上に机のふたをのせて授業を受ける」程度のものであったようです。

一五日、小学校の仮校舎が完成しました。一六日には、イスを運び込んで仮校舎での授業が再開されました。

このころになると、村の各地にバラックが建てられ、ようやく安心して生活ができる人が増えてきました。そのためか、児童の様子にも落ち着きが見られるようになりました。

校長は、児童の授業を見回りながら、なんとかもっと良い環境で授業ができないか考え始めました。

仮校舎の綾瀬小学校

仮校舎の授業

一九二四（大正一三）年二月二〇日、石井伴七校長は、担当している高等科の授業を終えると、出張の準備を始めました。午後、御所見小学校で高座郡教育会中部会の校長会議が開かれるからです。

出張の準備を終え、校長は教室から聞こえてくる児童と教員の声を聞いて、校舎を巡回してみることになりました。

巡回中、校長はできるだけゆっくり歩くことにしました。仮校舎ですから、早足で歩こうとすると大きな音が出るからです。教室に入ると、皆元氣よくあいさつをしてくれました。

しばらく教室にいますと、色々なことに気づきます。一月一五日の余震で割れたままの窓ガラス、少し傾きかけた黒板、きちんと閉まらないドア。どれも村役場に早く直してくれるように頼んでいましたが、突然のことでもあり直っていませんでした。

教室で授業を見ていると、隣の教室の音が聞こえてきます。板壁一枚の仕切りでは、どうしても声がもれてしまいます。児童は、先生の声をがんばって聞いているようですが、気が散っているようにも見えました。校長は、なんとかしなければと思いました。

昼食をすませ、校長は自転車で御所見小学校に向かいました。大法寺の前を通り、何回か坂を上り、息を切らせながらようやくたどり着きました。

他の小学校の校長はすでに着いており、校長会議はすぐに始まりました。会議の議題は、来年度の中部会の研究内容をどうするかということでした。国が教育内容を改め、新教科書もそろってきたので、どうしても研究が必要になったからです。

活発な会議の結果、校長会議は次のような内容を決定しました。

次年度の研究内容と中心校を次のようにする。

- 一、図画科研究は、渋谷小学校と御所見小学校が中心校となる。
- 二、唱歌科研究は、大和小学校と綾瀬小学校が中心校となる。
- 三、歴史科研究は、座間小学校を中心校とするが、他の小学校も研究する。
- 四、体操科研究は、合同で講師を呼び、職員と児童ともに研究する。
- 五、裁縫科研究は、有馬小学校と海老名小学校が中心校となる。

歴史科の研究

一九二四（大正一三）年度、高座郡教育会は、その中につくられている北部会に農業科を、中部会に歴史科を、南部会に国語科を研究委託しました。

中部会では、四月二八日に綾瀬小学校で開催された歴史主任会と評議員会で、歴史科の研究計画と内容を決め、早速研究を始めました。

一九二四年度の一学期と二学期には、各学校で、書物を使って歴史を科学的に研究しました。中部会は、歴史を便宜的に一三分科に分けて、会員をいずれかの分科に所属させ研究を進めるようにしました。中部会が分けた一三分科は次のとおりです。

制度史、経済史、美術史、思想史、産業史、文学史、社会史、風俗史、交通史、女性史、宗教史、外交史、郷土史

この研究の成果は、各小学校の校内研究や綾瀬小学校でたびたび開かれた歴史主任会の席上で発表されました。

石井校長は、歴史主任とともに、五月二五日に御所見小学校で開催された歴史科研究講演会や六月八日に座間小学校で開催された歴史科講演会に出席し、綾瀬における自分たちの研究の遅れを痛感しました。

そこで、八月一日から八日間にわたって開催される高座郡教育会主催の歴史科研究大学に数名の教員を送ることにしました。

二月一二日、中部会の歴史主任が座間小学校に集まりました。来年の二月九日に予定されている研究授業をどうするかということ、中部会として歴史科の教授細目をどう編成するかという話を話し合いました。

その結果、研究授業については、授業をいかに工夫して進めるかを考えるより、「教科書の教材をどうみるか」、「史料の教材化をどう進めるか」、「児童の理解程度はどうか」などを考えようということになりました。

歴史科の教授細目については、教科書の使用法に重点を置いたものにして、三月までに完成しようということになりました。

一九二五（大正一四）年二月九日、歴史主任とともに座間小学校の歴史科の研究授業を参観した校長は、今までと違った歴史科の授業にとまどいました。

これまでの歴史科の授業というと、児童が教科書を黙読し、教員が説明したり、児童の質問を受けて教員が答えるという形で進められていました。

しかし、この研究授業では、教師の動機づけを受けて、児童がよく調べて考えてから発表するというものでした。児童の発表に対して、児童から質問が出るということに驚きを感じました。

綾瀬小学校の研究授業

一九二五（大正一四）年、四月一日と二日の二回、綾瀬小学校で中部会の評議員会が開催されました。

出席した各小学校の校長たちによつて、一九二五年度の研究内容が決められました。

一九二五年度は、前年度の研究内容を活用して教材化につとめ、授業を進めることになりました。そのため、各小学校では校内の分担を次のようにしようと言うことになりました。

一、実力養成
目的観の確立、国史の文化的研究

二、教材研究
教科書研究、郷土史の研究

三、指導法の研究
児童学習心理、学習過程案
四、その他
設備（教具、図書）、施設

さらに、このような研究を続けながら、授業案をつくり研究授業をしようと言うことになりました。

研究授業は、五月二日の座間小学校を皮切りに、すべての小学校で行われました。

月 日	小学校名	学 年	題 材
五月二日	座間	尋六男	徳川家康
六月二〇日	有馬	尋六男女	徳川家光
六月二六日	御所見	高一男女	奈良時代の仏教
七月 九日	海老名	尋五男	菅原道真
十一月二日	大和	尋六男	大石良雄
十二月	綾瀬	尋五女	徳川光圀
十二月一五日	渋谷	高一	藤原氏の栄華

一二月には、綾瀬小学校の田戸マサヤ先生が研究授業を行いました。研究授業の実施まで、綾瀬小学校では何人もの先生が授業を行い、全職員で研究をしてきました。それぞれの授業のあとに行った協議で、校長は、「教科書が何をねらいとしているのか」、「児童にとって、どうすることがわかりやすいということなのか」をよく考えるようにと、繰り返し強調してきました。

授業の当日、田戸先生は児童に、徳川家康や徳川家光のことを思い出させました。児童からはさまざまな答えが返ってきました。田戸先生は、それらに丁寧に答えながら、今日は徳川光圀を

学習することを伝えました。

田戸先生は、自作の系図を示しながら、徳川家康と徳川光圀の関係を示した後、教科書を黙読するように指示しました。

黙読が終わると、「徳川光圀が何をしたのか」ということと「徳川光圀が大切にしていたこと」を調べるように指示しました。

児童は、黙々と調べ、ときには近くの児童と相談しながら、調べたことをノートにまとめました。

児童が大体調べ終わると、田戸先生は児童に発表させました。先生は、児童の発表を整理しながら、徳川光圀が皇室を大切にしていたことを強調して授業を終えました。

研究の広がり

一九二六（大正一五）年一月二三日、綾瀬小学校で、女子体育に関する協議会が開かれました。協議会終了後、石井校長は来校していた体操主任を完成間近の校舎と講堂に案内しました。校庭は余裕をもって整備されており、しかも、雨天でも体操のできるといいう講堂を見て、参加した人々は感心していました。

大会が近づく、校長は職員とともに、二月二六日と二七日の二日間にわたって座間小学校で開催される歴史科の研究発表大会の準備をしました。

この大会では、座間小学校で尋常科の五年と高等科一年の授業参観が行われるほか、中部七校の研究作品の展示や研究内容の発表が予定されていたからです。

綾瀬小学校では、研究授業までに集めた資料や教材、児童のノートを展示することにしました。

二月二六日、座間小学校には、研究授業を公開した田戸先生や校長のほか、たくさんの教員が集まりました。綾瀬小学校の展示の前で、誇らしげに説明する先生方の姿が多数見られました。

校舎の再建と借金

綾瀬村の財政危機

一九二三（大正一二）年九月一日の関東大震災で、綾瀬村は壊滅的打撃を受けました。民家の約半分は全壊し、残った家で倒壊を免れたのは、ほんのわずかでした。小学校をはじめ、寺院や神社が壊れ、橋は落ち、多くの道路が寸断されていました。

九月二一日、綾瀬村に臨時震害復興部ができると、綾瀬村の復興に手がつけられるようになりました。

このころから、綾瀬村では、家々でつぶれた家屋の片づけや家屋の修理・建築が始まりました。翌年の五月までに綾瀬村の家屋の九割までが復興しました。

民家の復興にくらべ、小学校の校舎の再建はなかなか進みませんでした。綾瀬村は、かつてないほどの財政危機に見舞われていたからです。

一〇月六日、小柳勝一村長は、高座郡役所に綾瀬村の財政の危機を訴えました。

綾瀬村を復興させるために二三万四〇〇〇円もかかるのに、震災の影響で村の年間の歳入が一万七二六九円しか見込めず、不足分を国に助けてもらえるようにしてほしいと訴えました。

綾瀬村の震災関係の収支予想

一九二三年度の綾瀬村の歳入		一万七二六九円
復興費用		
その内訳	合計	一三万四〇〇〇円
一、応急費		
①小学校費	三〇〇〇円	
②土木費	一五〇〇円	
二、復旧費		
①小学校建築費	五万三〇〇〇円	
②土木費	七万五〇〇〇円	
③斎場費	一五〇〇円	

村長は、毎日のように復旧工事の現場を見て回りながら、その費用をどうするか考えました。

校舎の再建を始める

一九二四（大正一三）年二月二五日、小柳村長は、村議会に小学校の校舎建築案を提案しました。

火災後に建設した校舎の木材の中で使えそうなものを使うなどして総坪数四五〇坪の教室と職員室をつくろうというものでした。そのための建設資金として三万五〇〇〇円の起債を提案しました。郡役所より、県から資金を借りることができるという連絡が入ったからです。

村議会は、おおむね賛成しましたが、村長の提案する資金計画に疑問を投げかける者もいました。火災後の校舎建設のための借金一万二〇〇〇円の返済が始まっていたからです。しかも、この借金は、短期間に返済しなければならないものだったからです。結局、村議会は村長の提案に同意しました。

村長は、学務委員会にも同様な提案をしました。席上、学務委員でもある石井校長は、「校地をどうするのか」と質問をしました。当時の綾瀬小学校の校庭は、半分近く陥没しており、長大な亀裂までありました。村長は、「現在の場所からあまり遠くない所に移転を考えている」と答えました。他の学務委員からは、「その土地を借りるのか、買収するのか」という質問が出ました。「できれば買収したい」と村長は答えました。

三月一九日、村議会は、六〇〇〇円の起債を決めました。この資金をもとに、県道沿いの山林を校地として買収しました。校地は、買収した土地に、寄付された土地を加え、約二ヘクタールにもなりました。この土地が現在の綾瀬小学校となりました。

八月一七日、村議会は、学務委員や村会議員を中心に建築委員二七名を選出しました。

建築委員を中心に、校舎再建計画の細部が検討されました。必要最小限の一三の教室と職員室・付属建物をつくるとして、どのくらいの費用がかかるか見積られました。幸いなことに、前回の

校舎建築の資料を参考にすることができました。

検討を重ねていくうちに、ただ再建するだけでなく、将来の教育を見すえて、新しい学校にしようということになりました。

雨天時に体操の授業をしたり、寒いときでも儀式ができるようにと、講堂もつくろうということになりました。さらに、将来の綾瀬村の担い手を育てるために農業教育に力を入れようと、小学校付属農園をつくることにしました。

一月二〇日、新たな計画を実現する費用も起債でまかなうことになり、村議会は、新たに一万八〇〇〇円の起債を議決しました。

しかし、この起債だけは県もなかなか許可せず、村長は何回も県庁に行ってお願いました。結局、県は一万八〇〇〇円を、一九二四年から五年分の起債の総額として認めました。

校舎の建築が始まる

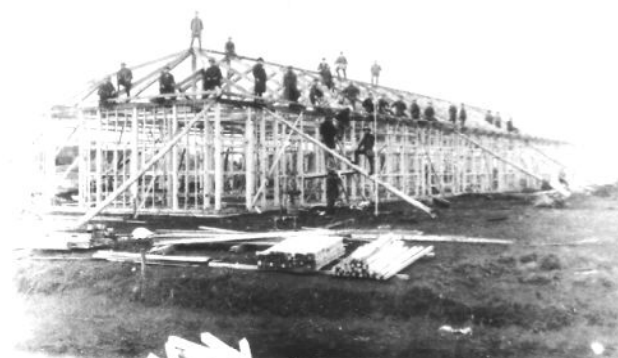
一九二五（大正一四）年一月一二日、石井校長や小柳村長、建築委員などが集まって、校舎の起工式が行われました。

これまでの二倍の面積になる小学校の敷地に立った校長は、これで理想の教育ができると、晴れ晴れとした気持ちになりました。

二月になって、小学校の建設工事が本格的に始まりました。村長は、工事の視察のたびに、この工事のための借金の負担を少しでも軽減できる方法はないか考えるようになりました。

郡役所に相談すると、低利で借り換えをしたらどうかということになりました。早速、村長は議会にはかり、起債の一部の借り換えを決めました。

深谷神社裏から現在地に移転した
校舎の新築工事（綾瀬小学校蔵）



小学校建設のための借金

期 日	目 的	金 額
一九二四年 二月二五日	校舎建設	三万五〇〇〇円
一九二四年 三月一九日	土地買収	六〇〇〇円
一九二四年 二月二〇日	校舎建設	一万八〇〇〇円

二月、綾瀬小学校に、桜井諒前校長や学務委員、村長などが集まりました。工事現場を視察した後、校章や校旗をどうするか話し合いました。新しく生まれ変わる綾瀬小学校にふさわしい校章や校旗にしたいと、校長は言いました。みんなも賛成して話し合いを続けました。こうして、綾瀬小学校に初めて校章や校旗が制定されました。

校舎の建設と校庭の整備は一二月中に終わり、残すは学校園の整備だけとなりました。

新しい校舎ができる

一九二六（大正一五）年一月になって、小柳村長は、石井校長と雑談をしながら校舎の落成式の準備を始めました。

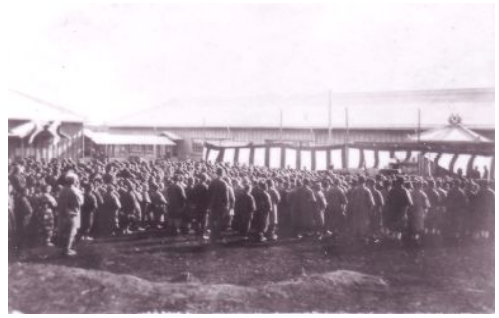
村長にとって、二度目の落成式でした。火事後、前村長とともに校舎建設に携わり、やっと完成したときの感動を忘れられません。そのときの校舎を大震災で失い、校舎再建と村の再建を同時に進めてきて、ようやく二度目の落成式を迎えることになりました。

このころまでに、村の道路や橋、用水路は、ほぼ復旧することができました。また、地震で全壊した寺院や神社も、県の補助を受けて再建することができました。

*少年団

戦前の少年団は、近世の子ども組、武士道を基盤とした組織、イギリスのボーイスカウトなど、多くの起源がある。

座間の幼年会は、近世の子ども組の伝統と児童文化活動に起源をもっている。



新校舎の落成式（綾瀬小学校蔵）

一月二五日、完成した綾瀬小学校で、校舎落成式が行われました。村長、校長、学務委員、学校の職員、建築委員、児童などが参列しました。参列した人は皆笑みを浮かべていました。式の後、参列した人々にはできあがった教室や講堂を見て回りました。一つひとつ見ながら、村長に感謝の言葉を述べている人もいました。

村役場に戻った村長は、助役や職員を集めて改めて礼を述べ、本日限りで辞職すると言いました。皆驚いて、村長に辞職をとどまるように言いましたが、村長は辞職の意思を変えませんでした。

話を聞いてかけつけた校長に対しても、村長は同じことを言いました。さらに、村長は、「足りない教室と分教場のことは助役にまかせているから」と言いました。

校長は、もうこれ以上止めても無駄だと思い、せめて三月二五日に予定している高座郡少年団の発会式には参列してほしいと言いました。村長も、参加することを承諾しました。

高座郡では、前の年に少年団講習が行われ、少年団の結成が進んでいました。少年団はボーイスカウトをモデルにしてつくられたもので、主に、小学校を単位として高等科の男子児童が参加していました。

高座郡の各小学校の少年団をまとめて一つの組織をつくる目的で開催されたのが、高座郡少年団の発会式でした。

三月二五日、綾瀬小学校の校庭に、高座郡内から集まった少年団が集まりました。たくさんの少年団員が集まっているにもかかわらず、校庭にはなお余裕がありました。

たくさん少年団員を前にして、校長は誇らしげに祝辞を述べ、こんな立派な学校をつくってくれた人々に感謝の言葉を述べました。



昭和のころの奉安殿（綾瀬小学校蔵）



同窓会寄贈の校門（綾瀬小学校蔵）

変わる社会と綾瀬村の教育

学校の整備が進む

一九二六（大正一五）年一月二六日、綾瀬村の村議会は、小柳勝一村長の辞任を承認しました。村議会は、村長のこれまでの功績に感謝して、慰労金として三〇〇円を贈ることを決めました。この日、村議会は、校舎第三館と渡り廊下・玄関・校地の整地代として八四〇〇円の予算を追加しました。

二月一日、見上一長が村長に就任しました。この年、全国的にひどい不景気で、各地で小作争議や労働争議が頻発していました。翌年には金融恐慌が起こり、不景気は一層進行しました。

不景気の中でも、村長は学校の整備を次々と進めました。

五月八日には、分教場の中でも壊れ方のひどい吉岡分教場と上土棚分教場の二校を七九〇〇円を使って新築しました。

一九二七（昭和二）年度には、念願の奉安殿を一五七五円もかけてつくりました。

一九二八（昭和三）年度には、早園分教場と綾北分教場の新築を計画しました。二校とも新たな場所に新築するために校地も買収しました。綾北分教場は一二月中に完成しましたが、早園分教場の完成は少し遅れました。この二校に要した金額は一万四二四六円にもなり、村の財政を圧迫しました。そのため、一九二九（昭和四）年二月九日、村長は不足する財源を補うための起債七〇〇〇円を村議会に提案しました。

修身科の研究を進める

一九二七（昭和二）年五月二九日、海老名小学校において高座郡教育会の総会が開催されました。高座郡教育会は、長い研究の歴史を踏まえて、不景気な時代に対応してより実質的な研究を

進めようということを決めました。

国語科や算術科など基礎学力を形成するに必要な教科や、修身科・体操科・唱歌科など指導に工夫が必要な教科の研究に力を入れることにしました。

中部会では、まず修身科の研究に取り組もうということになりました。

六月一日、石井伴七校長は、修身科主任とともに神奈川県師範学校付属小学校に行きました。この日、修身科の公開授業と研究会が行われるからです。

授業の様子を見た校長は、生き生きと発言する児童の姿を見て感心し、どうしたらあのような授業ができるのか考えました。

七月一〇日、研究会に参加した中部会の先生方は、海老名小学校に集まって、自分たちの研究をどのように進めるか話し合いました。

その結果、二学期以降、渋谷小学校を中心校として県視学の指導を仰いだ研究会を行い、各校で公開授業を行うことになりました。

修身科主任からこの話を聞いた校長は、早速、校内に全員参加で研究会を発足させました。

修身科には教科書がありました、短い読み物から教員が教訓を引き出すだけであれば大変短い時間で終わってしまい、教育の効果を確かめるのが難しい教科でした。いかに日常生活に結びつけた指導をするかが重要な課題でした。

校長も、高等科の修身科を担当していましたから、研究には大変興味がありました。校内の研究会には極力参加して研究に協力しました。

二月一五日、渋谷小学校で中部会主催の修身科研究会が開催されました。渋谷小学校には、県の視学をはじめ、高座郡のたくさんの方が集まりました。

参加した校長は、綾瀬小学校の先生方に、「自分の学校に取り入れられることはすべて吸収して帰るように」と言いました。

一九二八（昭和三）年三月一四日、綾瀬小学校の研究会が行われました。

この日までに、綾瀬小学校の先生方は校内で研究するだけでなく、交代でほかの小学校の研究

会に参加して研究してきました。

研究会の当日、綾瀬小学校にはたくさんの先生方が集まりました。校長は、集まった先生方を、完成したばかりの校舎第三館や奉安殿などに案内しました。

公開授業が終わった後、集まった先生方は第三館で研究会を行い、活発な意見交換をしました。

体操科の授業研究と連合運動会

体操科の授業は、大正時代の後半に大きく変わりました。体操の授業に器械体操や球技が取り入れられるようになり、熱心な研究が行われていました。

昭和期に入ると、体操科の授業研究は中部会の体操主任が集まって年一回行う授業研究のほかに、県教育会の巡回指導も行われるようになりました。

連合運動会は、大正時代以上に活発になりました。何回も体操主任が集まり、綿密に準備したうえに、事前に会場校に集まって児童の練習を行うまでになりました。

会場も、大正時代には中部七校の持ち回りでしたが、昭和に入って、綾瀬小学校に固定するようになりました。

連合運動会の会場

一九二五（大正一四）年	渋谷小学校
一九二六（大正一五）年	渋谷小学校
一九二七（昭和二年）	綾瀬小学校
一九二八（昭和三年）	綾瀬小学校

固定の理由は、震災後、道路が整備されたことと、綾瀬小学校が位置的に中部七校の中心にあるというのも大きな理由だったと思われますが、なんといっても広大な校庭があったからだと思います。

連合運動会には、尋常科の高学年と高等科の児童が参加しました。多くの小学校では、低学年の児童を遠足と称して連合運動会の応援に連れて来ました。ですから、連合運動会の当日には、綾瀬小学校に数千人も集まりました。

さらに、中部会の小学校では、他校の運動会に児童を参加させていました。どの学校でも、運動会のプログラムに他校から参加した児童のリレーが組まれていました。

綾瀬小学校の児童は、たびたび渋谷小学校の運動会に参加していましたし、渋谷小学校の児童も綾瀬小学校の運動会に参加していました。

運動会以外では、中部会ではバレーボールの試合も行いました。児童が参加しているだけでなく、教員も参加していました。

農業教育を進める

昭和初期、綾瀬村の家々の九割が農業に携わっていました。農業科という科目は、小学校の尋常科の高学年で必須でしたし、高等科でも一九二七（昭和二）年から必須科目となりました。

石井校長は、尋常科の低学年にも農業に親しませようと、全校での花壇づくりに取り組みせました。そのため、一九二五（大正一四）年に、学校園をそれまでの一〇倍以上の広さにしました。児童や教職員は、放課後になると競争で花壇づくりに励み、年々、学校園が広がりました。

綾瀬小学校の学校園の面積

一九二四（大正一三）年	八〇坪
一九二五（大正一四）年	九〇〇坪
一九二六（大正一五）年	一二〇〇坪
一九二七（昭和二）年	一三五〇坪

学校園は、単に花壇づくりの場所としてだけでなく、林業の実習林を兼ねたものになりました。一九二六（大正一五）年四月、児童や教職員の手で植林されました。

農業科の実習地も、一九二五年に、それまでの四倍以上にしました。

綾瀬小学校の実習地の面積

一九二四（大正二三）年	三六〇坪
一九二五（大正二四）年	一五七〇坪

実習地は、小学校の校門の前にあり、野菜や桑などが植えられ、農具や肥料をしまう小屋までありました。

綾瀬小学校の実習地が広いうえに、よく整備されている話が広まり、各地から見学者が来るようになりました。

一九二七年一月一五日、綾瀬小学校は、神奈川県教育会によって農業実習圃場成績優良小学校に選ばれました。

ひどい不景気の中で

ひどい不景気となる

一九二七（昭和二年）三月、全国の中小の銀行にたくさんの人が押しかけ、預金を下ろそうとしました。押しかけられた銀行の中には、資金が間に合わず休業に陥った所もありました。金融恐慌の始まりでした。

銀行の休業により、商工業は混乱し、経済は沈滞しました。経済の沈滞により、国や県だけでなく、町村も深刻な財政難に陥りました。

一九二九（昭和四）年六月、全国各地で、財政難を理由として教員の給料不払い・減給・減首等が起きました。中には、教員をあまりにも減らしすぎて、一学級が一〇〇人を超えてしまった小学校もありました。

八月、浜口内閣は、国民に「財政削減」と「消費節約」を訴えました。政府は、「消費節約」を国民規模ではかるために、公私経済緊縮運動を繰り広げることにし、全国に通達しました。

八月一三日、神奈川県は、国の意向を受けて、市町村に予算の削減を指示しました。また、九月に行われた町村長会議の席上、山県治郎・神奈川県知事は起債の整理を示唆しました。

神奈川県全体で、関東大震災からの復興のために一億六八六三万円も起債し、県民一人当たりになると一万一四八九円にもなりました。綾瀬村も、小学校建築のために五万九〇〇〇円の起債をしていました。

この会議に出席した見上一長村長は、「いよいよ来たな」と思いました。起債の返済猶予は三月までで、秋から利子や元金の返還が始まるのに、見通しが全く立っていませんでした。

苦しい日本経済に追い討ちをかけるように、一〇月二四日、ニューヨークの株式市場は大暴落し、アメリカ中が大混乱になり、世界恐慌が始まりました。

綾瀬村だけでなく、日本の農村は養蚕によって支えられ、その生産物から加工される生糸の大部分をアメリカに輸出していました。その影響は、翌年綾瀬にも大きく現われました。

起債をめぐる攻防

一九二九（昭和四）年一月四日、神奈川県知事や県下の町村会の代表は、東京に向かいました。内務省や大蔵省に、起債の無利子延納を願ひ出るためです。この日、内務省や大蔵省には東京や千葉など関東各県の関係者も来ていました。どの府県も、関東大震災後の起債の返還を迫ら

＊濃尾大地震

一八九一（明治二四）年一月二八日、濃尾地方（美濃・岐阜県・尾張（愛知県））で起きたマグニチュード八・〇の地震。死者七三三二人、倒壊家屋一四万二〇〇〇戸の被害があった。国は、災害復旧のために、岐阜県だけで一五〇万円を支出した。

れていたからです。

府県や町村からの延納願いに対して、内務省や大蔵省は、延納は認められないと繰り返し言いました。府県側も、濃尾大地震の例を出して、なんとかしてほしいと迫りました。

結局、内務省と大蔵省は、「延納は認められない。返せないなら、借り換えをしろ」と強気の発言でした。

一月一日、山県知事は、県下町村会幹事会の席上、集まった町村長に対して国との交渉の経緯を説明し、早く借り換えをするように指示しました。しかし、その席で同意した町村長は一人もいませんでした。

一九三〇（昭和五）年二月一日、見上一長に代わって、峯尾文太郎が村長に就任しました。峯尾村長は、昨年まで全国町村会長を務めた金子角之助・藤沢町長とも旧知の間柄でした。村長は、金子角之助から全国町村会が行っている話し合いについて聞き、その話し合いが山場にさしかかっていることも聞いていました。

三月三日、ついに横浜の生糸相場が暴落しました。横浜生糸市場は恐慌状態になり、県下の農村に衝撃が走りました。春繭の準備を始めた農家の中には、生産をやめようとした農家もいました。

五月三日、神奈川県師範学校で開催された町村会の大会に出席した村長は、その異様な熱気に圧倒されました。県の内務部長が出席しているにもかかわらず、町村長の中には、震災のための起債は払う必要がないと大きな声で言う人もいました。大会は、起債について町村会が協力して当てることだけを決議し、閉会しました。

七月一四日、町村会幹事会は、全国町村会の意向も考慮して、起債について次のような妥協案を提示しました。

一、来年度から償還予定の起債は、償還期限を三年間延長して、一九三四（昭和九）年度から支払う。

しかし、この妥協案に賛成する町村が少なく成案となりませんでした。

八月一日、町村会は、中郡の大磯小学校で臨時総会を開き、起債に関する運動を続けるために各郡から一〇二名の実行委員を選び、実行委員会をつくることを決定しました。

給料の一部を寄付

ひどい不景気の中で、峯尾村長は、一九三〇（昭和五）年度の予算を編成しなければなりませんでした。すでに決まっていた役場の建て替えを中止し、あらゆる部門の予算を削減しました。それでもなかなか減らせない部門もありました。役場職員の給料、名誉職の手当、教員の給料などでした。

中でも教員の給料は、他町村とくらべると決して高いものではありませんでしたが、綾瀬村予算の約半分を占めていました。

村長は、ともかく減らせるだけ減らして予算を作成しました。不足したら、追加予算でなんとかしようと考えました。

七月になって、村長は、村議会に村会議員をはじめ村の名誉職の手当を全廃することを提案しました。

議員たちは、自分たちの手当の全廃はともかくとして、村長や助役の手当まで全廃することはないと言いました。これから起債問題の処理が山場になるのに、村長の手当まで全廃するのは問題だという人もいました。

村長は、助役とも相談したことだと言い、自らの手当の全廃を主張しました。結局、村議会は同意しました。このとき、役場職員たちも給料の一割削減を申し出たので、村議会はこれにも同意しました。

名誉職の手当全廃の話を聞いた綾瀬小学校の先生方は、自分たちも何かできないかと考えました。

七月末、先生方は、石井伴七校長と相談して、自分たちの一年分の給料の約一割に相当する一〇〇〇円を寄付することにしました。

こうして綾瀬村は、財政危機をなんとか乗り切りましたが、県当局は、こうした解決方法を好ましいと考えていませんでした。

県当局としては、町村で教員給料をめぐって混乱が生じれば、肝心の起債償還問題の解決が延びると考えたからだと思われます。

このころ、小出村（現在の藤沢市の一部）では、村民の中に教員給料の引き下げと教員数削減を求める署名運動が起きていました。町村会も教員の給料引き下げを検討していました。そのため、教員の中には、これに反発する動きも出ていました。

起債問題のゆくえ

一九三一（昭和六）年一月七日、起債問題は新たな展開をしました。新聞の報道によると、神奈川県が政府に、市町村からの起債償還を前提とした予算を組むことを示し、政府は、そのための資金として低利の融資をほのめかしたとのことでした。

一月一二日、町村会幹事会の席上、県当局は、国との交渉経過を説明し、早期に起債償還問題を解決したいと言いました。しかし、中には償還に不満を述べる町村もあり、具体的に、どう解決するかの話し合いをすることができませんでした。

一月二八日、再度、町村会幹事会が開催され、県当局は、一九三一年度の予算を町村からの起債利子の償還を前提として組むことを発表しました。「どうしても返せない」と主張する町村があると、県当局は、「どうしても払えない町村の分は県が立て替える」とまで言いました。

幹事会の話しを聞いた峯尾村長は、いよいよ決断するときだと考えました。

村長は、村議会と相談しながら、起債の償還について考えました。今後の村民の負担を少しでも減らすためには、これまでの金利より低い金利で借り換えた方がよいという結論になりました。

た。

早速、村長は、これまでの起債についての書類を整理して、県庁に出向き、担当者と話し合いました。

三月五日、村議会は、四〇〇〇円分の起債の借り換えを議決しました。村長は、これで少し楽になると思いました。

小学校建築にかかる起債の借り換えについては、なかなか進みませんでした。金額が大きいのと、返済の見通しが立たないからでした。

一九三二（昭和七）年四月、小学校建築費の借り換えが実現しました。

四月七日、村議会は、小学校建築費の一部、三万五〇〇〇円の起債を次の条件で借り換えすることを議決しました。

『一九三三（昭和八）年度まで据え置き、一九三四（昭和九）年から二三年間で返済する』

この起債の返済は、翌年に一年間延期され、一九三五（昭和一〇）年になってようやく始まりました。綾瀬村の財政がさらに悪化し、利子が支払えなくなつたからです。

この起債以外の起債の借り換えは、一九三五年になって実現しました。しかし、その返済は滞り、一九四三（昭和一八）年になって、ようやく利子を支払うようになりました。

これら小学校建築にともなう起債は、戦後に何回かの借り換えを繰り返し、一九五六（昭和三一）年ごろに、ようやく返済が終了しました。

郷土と子どもに根ざした教育

厳しい時代の始まり

金融恐慌に続く世界恐慌によって、日本中がひどい不景気になりました。一九三〇（昭和五）年になると、神奈川県下の村々では教員の削減を求める動きが起きました。教員の中には、こうした動きに反発したり、児童の厳しい生活に同情して、政治を変えようとする運動に参加する人が出てきました。

神奈川県では、こうした教員の動きに対して該当する教員を県庁に呼び、解雇を言い渡したり、教員免許状を取り上げるなど、厳しい態度で臨みました。さらに、校長やベテランの教員を集めて、たびたび思想問題に関する講習会や講演会を開くようになりました。

思想問題講演会や講習会の回数

一九三〇（昭和五）年	一	回
一九三二（昭和六）年	二	回
一九三二（昭和七）年	四	回

これらの講演会や講習会では、一九二五（大正一四）年以降に政府や神奈川県が行ってきた思想取り締まりの経過が説明されたり、教員の教育内容や言動で注意する点などが示されました。講演会に参加した石井伴七校長は、これまでのように多様な教育研究ができなくなると思いました。大正時代には、さまざまな意見が学校の内外に飛び交い、競って研究を進めていました。そのため、教育方法や教育内容も大変深まりました。

ところが、一九三〇年ごろから、教員の言動や教育内容が細かく規制されようとしていました。

校長は、ただでさえ経済問題で意気消沈している教員に対して、教育をどう進めるか考えるようになりました。

郷土と子どもに根ざした教育

一九三〇（昭和五）年、神奈川県下には、教育費削減や教員削減の圧力が高まりました。幸い、綾瀬村では峯尾文太郎村長や石井校長の努力により、教員削減を免れました。

校長は、今まで以上に教育効果を示すことができなければ、同じような圧力を免れないだろうと考えました。

そこで校長は、連合運動会や連合唱歌会で良い成績を上げることによって、児童や村民を勇気づけようと考えました。

連合運動会は、綾瀬小学校で行われるようになっていましたが、なかなか優勝できませんでした。優勝できれば村民も喜ぶだろうし、児童の意欲も高まるだろうと考えました。

また、このころ、連合唱歌会の会場は、海老名小学校に固定するようになっていました。日ごろの唱歌の指導の成果が試されることになるので、中部会の各小学校では先生方が熱心に指導しました。校長は、唱歌の時間だけでなく、運動会や三学期末に行われる学芸会など、さまざまな機会をとらえて歌を歌うようにすすめました。

さらに校長は、先生方を国史や地理や綴り方の講習会に積極的に参加させ、郷土や子どもの生活に根ざした教育を進めようと思いました。

一九二八（昭和三）年の県教育会主催の郷土中心研究会は、高座郡教育会の研究に大きな影響を与えました。

一九二八年から一九三一（昭和六）年にかけて、高座郡教育会は、国史や地理の講習会や綴り方の講習会と研究会を何回も行い、郷土中心教育の基礎づくりをしようと思いました。

〈地理や国史の講習会と研究会〉

一九二八（昭和三）年 一月二七日 鎌倉師範学校にて県主催郷土中心研究発表会と展覧会

二月二七日 鎌倉師範にて県主催地理研究会

九月 九日 海老名小学校にて国史講習

九月一六日 海老名小学校にて国史講習

九月三〇日 海老名小学校にて国史講習

一九三〇（昭和五）年 六月二二日 海老名小学校にて郡教育会主催国史講習会

十一月三日 海老名小学校にて地理科主任会

十二月 七日 海老名小学校にて地理科講習会

一九三一（昭和六）年 一月二五日 海老名小学校にて地理科講習会

四月一九日 海老名小学校にて地理科講習会

七月一日 渋谷小学校にて地理科講習会

一九三二（昭和七）年 十一月二日 藤沢小学校にて県主催地理研究会

〈綴り方の講習会と研究会〉

一九二八（昭和三）年 九月一〇日 海老名小学校にて綴り方講習

一〇月二三日 海老名小学校にて綴り方講習

十二月一六日 中部会主催綴り方講習

一九三〇（昭和五）年 六月 八日 海老名小学校にて中部会主催綴り方研究会

六月二九日 海老名小学校にて中部会主催綴り方講演会

七月二八日 海老名小学校開催の綴り方研究会

十一月一〇日 海老名小学校にて綴り方教科指導

一九三二（昭和七）年 六月 四日 女子師範にて県主催郷土教育研究会

*一九二九（昭和四）年は不明。

校長は、国史や地理の学習を通して、児童が郷土と自らの生活を見直すことができると考えました。

先生方には、綾瀬の地理がわかるような読本をまとめるようすすめて、「綾瀬村誌」を作成させたり、郷土の地形がわかるような模型をつくらせました。

児童には、読書をすすめました。学級文庫を充実させ、学級の本が増えてくると、それらの本を一カ所にまとめ、一九三一年に村長とも相談して村立図書館を設置しました。

また、児童に自分が見たことや感じたことを綴り方（作文）に書くようにすすめ、綴り方を通して、自らの生活を見直させました。

農業教育にかける

峯尾村長は、ひどい不景気から抜け出すために、農業の改良を進めようとなりました。宅地を利用した畜産や果樹や園芸作業の栽培を進めたり、養蚕中心の経営から普通作物や蔬菜そさいの栽培を取り入れた経営に切り替えるように、農家にすすめました。

ところが、畜産や果樹では技術や資金が必要のため、村長のすすめる方法に切り替える農家は多くありませんでした。

そこで、村長は石井校長とも相談して、実業補習学校や小学校の農業科の授業で新しい考え方を広めようと考えました。

折しも、県教育会や高座郡教育会は農業教育に力を入れようとしていました。

それまで、高座郡では年に二回程度の農業主任会を開くくらいでしたが、一九三一（昭和六）年になると、農業主任会のほかに、農業教育の研究会だけでも二回開かれました。

一九三一年六月三〇日には、綾瀬小学校を会場として、農業教育の指導会が開かれました。校長は、参加した高座郡の先生方の熱心な姿を見て、村長とともに、農業教育にかけてみようという気持ちが強くなりました。



1926(大正 15)年建設の綾瀬小学校旧校舎（解体中を撮影[昭和 39 年]）

九月一九日、新聞を見た校長は、驚きました。満州事変の始まりを伝える記事でした。本格的な戦争になるのではという不安が起きましたが、このようなときこそ教育に力を入れようと思い直して、綾瀬小学校に向かいました。

九月二三日、中部会では、学校農園相互視察を行いました。視察に出かける農業主任に、校長は、他校の様子を良く見て、取り入れたいことがあったら報告するように言いました。さらに、視察に来た中部会の農業主任たちに、「問題があったら遠慮なく言ってほしい」と言いました。

一九三二（昭和七）年、二月一五日から一八日の四日間、県内の小学校の農業主任が愛甲農蚕学校に集められ、農事講習会が行われました。

翌一九日には、綾瀬小学校を会場として、高座郡農業科研究会が開かれました。研究会に参加した高座郡の先生方は、講習会で聞いた話を、今後の農業教育にどう生かそうか熱心に話し合いました。

校長は、農業主任に、積極的に視察に行くようにすすめました。農業主任は、県内の小学校だけでなく、大船農事試験場や農学校に何回も出かけ、新しい技術や考え方を学んで帰って来ました。

高座郡教育会では、一九三二年六月一四日と九月一六日の二回、農事教育の相互視察を行いました。

農業教育が盛り上がってくる中で、六月二七日と二八日に、県教育会は、平塚農学校で農業教育研究協議会を開催しました。その席で、綾瀬小学校は、農業科選奨校として表彰されました。

綾瀬小学校が農業教育で表彰されるのは二度目でしたが、ひどい不景気の中で、村長とともに、教員削減の嵐を乗り越えてきた校長にとって、このうえもなく、嬉しいできごとでした。

こうして、多くの人の善意と努力により、火災と震災を乗り越え、綾瀬村の教育は次の時代に引き継がれて行きました。